

# 本多 富正



1572年～1649年

江戸初期の福井藩筆頭家老。府中領主。  
生涯にわたり結城秀康に仕え  
城下の整備、治水、産業の発展に力を注ぎ  
現在の越前市(武生)の基礎を築く。

どんな子だった?



## 人質となった秀康の小姓として、大坂城へ

富正は幼名を源四郎といい、本多重富の長男として三河国大平村(愛知県岡崎市大平町)で生まれました。父は松平信康(徳川家康の長男)の家臣でしたが、織田信長の命令で信康が切腹となったため蟄居し、その後、弟の本多重次に身を寄せたと考えられています。天正11(1583)年、家康の次男の於義丸(後の結城秀康)が豊

臣秀吉の養子として大坂城へ人質に出されると、重次は自身の長男の仙千代(後の本多成重)を付き従わせますが、翌年、兄重富の子である富正と交代させます。富正が14歳の時のことでした。以降、富正は生涯にわたり秀康に最も信頼される家臣として仕えることになります。

episode  
1

## 秀康の側近として主君の武功を支えた富正

天正14(1586)年、秀康14歳、富正16歳の時、秀吉による九州征伐が始まると、富正は秀康の初陣に付き従います。秀康は岩石城(福岡県田川郡添田町)攻めの先鋒を見事に果たし、その後の日向国(宮崎県)平定戦や小田原の北条征伐にも目覚ましい活躍を見せています。

その後、秀吉は実子の鶴松が誕生すると、鶴松を跡継ぎにして、秀康をさつさと下野国(栃木県)の結城氏へ養子に出してしまうのでした。こうして秀康は、結城10万石を受け継ぎ結城秀康となり、ともに下野国へ移った富正は、側近として秀康に仕え続けます。

関ヶ原の戦いでは、その前哨戦となった会津征伐に参戦。上

杉景勝を牽制した功により、秀康は、家康から越前国68万石を与えられ、この時、富正が先発して北庄を受けます。そして、初代の北庄藩主(北庄藩II後の福井藩)秀康のもとで家老職に就き、府中(越前市)3万9千石の領主となります。

越前市には富正に宛てた多くの書簡が残り、それをもとに富正や北庄藩の動きをまとめた『府中領主 本多重正の生涯』は、富正の人物像を次のように語っています。

富正を初代として明治維新に至る本多家九代の領主は、それぞれ治世に、産業の発展に、あるいは町づくり村づくりに領民のために尽くされたが、その根本となるものは、初代富正の



(県内) 越前市 福井市  
(県外) 愛知県 栃木県 茨城県

五十年に及び卓越した政治力によるものであろう。(中略)

さらに慶長十七年の久世騒動や元和九年の第二代藩主忠直豊後配流の問題の時など、あわや改易となるばかりの福井藩の一大事の時、国家老としてよく藩を守り、無事切り抜けられた

## 家康からも信頼を寄せられ、

慶長11(1606)年、家康が駿府に隠居所を建てることになり、富正はその工事に携わります。工事が終わると富正は家康からその功を讃えられ、関ヶ原の戦いの時に家康が腰に差していた秘蔵の刀を賜っています。

その翌年9月には、秀康の縄張りによる北庄城が完成。ところが完成から半年ほど後の慶長12(1607)年、秀康は34歳の若さで病死してしまいます。苦楽を共にしてきた秀康の死に際し、後を追って富正が切腹すると察した家康や将軍秀忠は、それを禁じる命令を富正に出しています。

また、慶長17(1612)年には、越前領内で起こった殺人事件を発端に、丸岡領主の今村盛次と富正の対立問題に発展したことがあります。久世騒動と呼ばれるこの事件は、藩内の家臣を二分し、ついに幕府の裁きに委ねられることになりました。その結果、富正に軍配が上がり、今村の一派は全て排除され、幕府は今村に代わり本多成重を北庄藩に移して家老に据え、丸岡城を与えます。成重は富正の従兄にあたり、かつて秀康の大坂城での人質時代、富正が役目を交代した間柄でもありました。以降、富正と成重の両本多が越前の松平家を支え、江戸時代にわたる藩の基礎を築きます。

慶長19(1614)年の大坂冬と翌年の夏の陣では、越前軍の功績に対し、富正は家康から黄金50枚を拝領。また、寛永元

のはこれら多くの友人知己の支えがあったからに違いない。  
いま富正の生涯を見ると、いまさらながら、本多富正という人物の偉大さに認識を新たにしているものである。

《武生立葵会編『府中領主 本多富正の生涯』あとがきより》

## 越前松平家3代に仕える

(1624)年、秀康の次男忠昌が第3代藩主となった際には4万5千石に増加され、さらに大名となるよう幕府から勧められますが、富正はそれを辞退。しかし、幕府は富正が江戸城へ登城する時には大名が使う柳間に通し、また、諸大名のように将軍に拝謁できるなど、大名格の待遇を行いました。

正保2(1645)年、忠昌が死去すると富正は隠居し、その4年後、府中館内で78年の生涯を閉じます。

秀康とともに越前に入ってからほぼ半世紀、富正はひたすら藩主を助けて福井藩や府中の治世にあたり、九頭竜川や足羽川、日野川の治水や用水の整備、福井城下や府中の町の整備、寺社の保護、打刃物・和紙といった地場産業の振興など、多岐にわたる功績を残しています。

※塾居：自宅などに閉じこめて謹慎すること。武士に対する刑の一種。

※前哨戦：本格的な戦闘に先だって行われる戦闘。

※北庄藩：第3代藩主忠昌(秀康の次男)の時代に、北庄を福居(のちに福井)と改める。それまでの名称は北庄藩という。

※配流：辺境の地へ追放する刑罰。

※改易：領地を没収し身分を奪う刑罰。

※縄張り：築城においては、建物の配置計画を指す。

※拝謁：目上の人に会うこと。

### check for 本多 富正



『府中領主 本多富正の生涯』武生立葵会  
加来耕三『名家老とダメ家老』講談社  
吉元吉之助『たけふ今昔アラカルト』  
『福井県史』通史編3近世一 福井県  
大島昌宏『結城秀康一秀吉と家康を父に持つ男』PHP研究所  
津野田幸『豊臣軍戦記』第4巻 学研パブリッシング  
『戦国名将列伝』新人物往来社



福井県の名物の一つ「越前おろしそば」は、富正が京都から府中に連れてきた金子権左衛門という家臣の発案と伝わります。また、そばは荒れた土地でも育ち、米の代用になることから、そばを大根おろしの風味で美味しく食べる方法を富正が奨励したともいわれます。

# 結城 秀康



1574年～1607年

徳川家康の次男、越前福井藩の祖。  
秀吉の養子となった後、結城家の娘婿に。  
関ヶ原の戦いで戦功を上げ、  
越前68万石の藩主となる。

どんな子だった?



家康の次男に生まれながらも、政略にほんろうされた少年時代

徳川家康の次男として誕生した秀康は、羽柴秀吉と家康の二大勢力のはざま、幼少期から青年期にかけて波乱の時期を過ごしました。生まれは、家康の浜松城下にある有富見村（浜松市西区雄踏町）。母は、家康の正室に仕える奥女中の於万。家康は正室に気を遣い、妊娠した於万を最も信頼する家臣の本多重次に預けました。そして誕生し

たのが於義丸、後の秀康です。於義丸は、11歳で人質として秀吉の養子となり、その5年後、養子先からさらに養子に出されます。その間、秀康は14歳の初陣で先鋒の大役を務めたほか、数々の手柄を立て、その優秀さは、若くして一流の器量を持つ武将と賞賛されるほどでした。

episode  
1

## 人質として秀吉のもとへ

天正7（1579）年、家康の長男である信康が、逆臣の疑いにより切腹させられるという事件がありました。長男を失った家康の跡継ぎは、本来なら次男の秀康となるところを、家康は秀康を飛び越えて三男（後の徳川幕府第2代将軍秀忠）を跡継ぎに据えます。秀康の不運はさらに続き、小牧・長久手の戦いで対決した家康と秀吉の和睦条件として、秀康が養子とは名ばかりで命の保障のない人質に出されます。家康の天下取りをテーマとする小説『覇王の家』では、このように表現されています。

当時の日本の外交習慣にあったのは人質をさし出せば降伏であ

り、その相手に臣従することだが、この場合の家康のみは異例の考えの上に立った。（中略）

人質には、家康の庶子の於義丸（のちの結城秀康）がえらばれた。それを大坂に送る。

捨てたのも、同然であった。なぜならばそれによって秀吉との臣従関係をふくめたいかなる外交関係も成立しなかったからである。本来なら家康みずからが於義丸をつれて大坂へゆき、秀吉に拝謁しなければならぬ。それによって隷属関係が成立する。

家康は行かなかった。いわば断交のままであり、もつと表現を的確にすれば、家康は秀吉の天下を承認していないことにな



(県内) 福井市  
(県外) 愛知県

栃木県 茨城県

る。於義丸はただ大坂へ送られて行っただけであった。(中略)  
織田信雄の使者である滝川雄利は、家康が大坂へ送った人質の於義丸の消息についてくわしく語った。お元氣におわすこと、お利発なことは大坂城内でも評判であること、殿下がわが子のようにお可愛がり遊ばしていること、などといったことを語った。

## 関東の名門結城家へ、そして、越前北庄へ

天正17(1589)年、秀康の人生の進路は再び方向を変えることとなります。秀吉の側室となっていたお市お市の方の娘、淀君お茶々が鶴松を出産。秀吉は待望の実子、鶴松を跡継ぎに決定し、翌年には、さつさと秀康を結城家の婿養子に出してしまいます。関東に勢力を持つ名門の結城家と秀吉が、繋がりを強化するための政略結婚でした。秀康は下野国しものけ(栃木県)に移り、天正18(1590)年、結城晴朝はるともの姪と結婚し、家督と領地を継ぎます。

時は移って慶長5(1600)年、秀康は、関ヶ原の戦いで家康側について目覚ましい活躍を見せます。戦いに勝利した家康は、秀康の働きぶりを讃え、越前68万石を与えました。諸侯の中で最高の恩賞によって、加賀の前田に次ぐ大大名が誕生。新しい城の縄張りなわばりは、家康が自ら行ったともいわれます。また、秀康の越前入りに際しては、秀康の大坂時代から行動をとともにしてきた本多成重なるしげ(家康の重臣重次の息子・後の初代丸岡藩主)と、本多富正とみただ(成重の従兄・後の府中城主)も、越前に移り住みました。

徳川幕府の開幕以降の秀康については、歴史解説書の『福井藩』が詳しく記しています。

たしかに於義丸は、他の人質とはまるで別扱いをうけて優遇されていた。於義丸が大坂に到着するや秀吉は烏帽子親になって元服させ、自分の秀と家康の康をとって「秀康」と名乗らせ、豊臣家の養子とし、まだ十一歳の身ながら従五位下侍従に叙任させた。

《司馬遼太郎著『霸王の家』より》

秀康は、秀忠から兄として尊重され、他の大名とは異なる待遇を受けたため、越前家は「制外の家」とされていた。

慶長七年(一六〇二)春、秀康は越前拝領の礼を述べるために江戸へ赴いた。秀忠は鷹狩にかこつけて品川にて待ち合わせ、同道して江戸城に招き入れている。(中略)

慶長十年四月、秀忠が將軍に就任し、同年七月には秀康も権中納言に昇進した。この頃の秀康は病氣勝ちで、秋には加賀白山麓さんろくの温泉で湯治をしている。

《舟澤茂樹著『福井藩』より》

父との縁が薄く、不遇ふよな少年時代から青年時代を送りながらも、優れた武将として頭角を現し、ようやく父に認められた秀康。しかし、その生涯は短く、城が完成した翌年の慶長12(1607)年、病がもとで34歳の生涯を閉じました。

### check for 結城 秀康

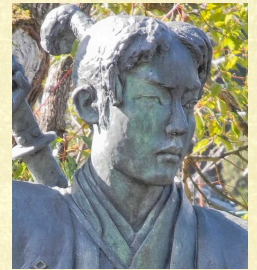


梓澤要『越前宰相秀康』文藝春秋  
舟澤茂樹『福井藩』現代書館  
松原信之編『福井県 謎解き散歩』新人物文庫  
司馬遼太郎『豊臣家の人々』中央公論社  
司馬遼太郎『霸王の家』新潮社  
中島道子『戦国の「いい男」「ダメ男』』PHP研究所  
『図説福井県史』福井県  
『福井市史』通史編二近世 福井市  
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



福井城(当時は北庄城)は、1601年から6年をかけて完成。その規模は1辺が2キロメートルほどもあり、堀が5重に巡らされ、本丸には4重5階の天守がありました。しかし、1669年に焼失して以降、天守閣が再建されることはありませんでした。

# 佐々木小次郎



?年～1612年

一乗谷の道場で剣術を学び  
つばめ返しをあみ出したとされる。  
巖流島での宮本武蔵との  
一騎打ちで有名な剣豪。

どんな子だった?



## 平安時代から続く寺に生まれ、一乗谷で剣の修行

小次郎の生誕地はいくつも説があり、福井県では福井市浄教寺町や越前市北坂下町の高善寺、県外では山口県岩国市、福岡県添田町、滋賀県安土町が名乗りを上げています。

その一つ越前市の高善寺は、永観元（983）年に創建された古刹。歴代住職は、佐々木四郎高綱の末裔とされ、その過去

帳と系図に小次郎と見られる人物の名があります。

少年時代には、一乗谷朝倉氏に仕える富田勢源の剣術道場に  
通い、剣法「つばめ返し」をあみ出して、16歳から18歳の頃、  
諸国を巡る剣術修行の旅に出たと伝えられます。

episode  
1

## 宮本武蔵とのライバル対決

小次郎は江戸時代初期に剣法「つばめ返し」で名を轟かせ、宮本武蔵を主人公とした物語で有名な登場人物。ライバル役の美青年として物語を盛り上げます。そのクライマックスは、巖流島での武蔵と小次郎の決闘シーン。武蔵は2時間も遅れてきた上に、小次郎が刀を抜いて鞘を海に放つと、鞘が不要なのは負けを意味すると指摘して動揺させ、さらに「小次郎、敗れたら」と宣言。小次郎は通称「物干し竿」という約1メートルの長太刀で斬りつけますが、武蔵の振り降ろした權の一撃に倒れます。

巖流島の決闘シーンは、江戸時代から現代に至るまで、芝居や浄瑠璃、小説、映画、ドラマなど、数多くの作品に描かれて

きました。とくに昭和の中頃に吉川英治の小説『宮本武蔵』がたいへんな人気となり、それ以降の様々な作品に影響を及ぼし、前述のような決闘シーンが定着したとされます。物語の中で小次郎の人物像も様々に描かれてきましたが、武蔵に比べて小次郎の史料は少なく、実際には謎の多い人物です。

越前市発行のパンフレットでは、生誕地説の一つ越前市北坂下町の高善寺と小次郎の関係について、次のように紹介しています。

水間谷、北坂下にある高善寺の系図に、17代住職宗善の第六男の記述がある。「六男、武門に入る。小太夫と称す」。この小太夫がすなわち小次郎と伝えられている。土地の言い伝えでは、

(県内) 福井市浄教寺町 越前市北坂下町  
(県外) 山口県岩国市・下関市  
福岡県田川郡添田町  
滋賀県蒲生郡安土町  
福岡県北九州市

## 巖流島の名の由来に

武者修行の旅を決意し寺を出るとき、五郎八茶碗を割り「剣の道に一生をかけ、二度と寺に戻らん」と誓ったという。法名は「道誓信士」、享保17（1732）年に郷里の人々によって墓が建てられている。（中略）

「つばめ返し」は、勢源の道場で修行をしていたときにあみ出した「虎切剣」の剣法だともいう。ツバメが背をひるがえして飛ぶ姿を見てあみだした「虎切剣」。その必殺剣法で剣豪として戦国時代に名を馳せ、慶長17（1612）年、巖流島での宮本武蔵との決闘の日を迎えることになる。

その後、小次郎は「巖流」という流派をつくり、名を佐々木巖流と改名（「巖流」は岸流、岸柳、岩流とも）。やがて小倉の細川家に仕えて小倉城下（福岡県北九州市小倉区）に道場を開いたとされます。そして、武蔵が細川家の家来を通じて試合を申し込み、巖流島の決闘へと展開するのですが、その島は、関門海峡（山口県と福岡県の間）に浮かぶ無人島で、正式名称は船島といえます。

その船島を見渡す手向山（福岡県北九州市）には、武蔵の養子の宮本伊織が建立した石製の顕彰碑があります。武蔵が没して9年後に建立されたもので、その碑文は信頼できる史料とされています。

兵術の達人で岩流と名乗る者がいた。その者と雌雄を決したいと求める。岩流は真剣で勝負すると言う。武蔵は木刀を使用すると言い、堅く勝負の約束をした。長門と豊前の間に島があり、舟嶋という。武蔵と岩流は同時に勝負の場に立った。三尺

巖流島の決闘から150年ほど後の安永5（1776）年に、熊本藩士が編纂した『三天記』では、出身は越前国宇坂庄浄教寺村（福井市浄教寺町）、富田勢源の弟子となり、一乗谷川上流の一乗滝で「つばめ返し」の剣法を身につけたと記されています。ただし、富田勢源本人から剣を学んだとすると、決闘時の小次郎が相当な高齢になってしまうことが指摘されています。

の白刃を手にしてきた岩流は、命を顧みず術を尽くす。武蔵は木刀の一撃で相手を殺した。電光より早かった。それ以降、人々は舟嶋を岩流島というようになった。

《福田正秀『宮本武蔵研究論文集』「資料編」より

佐々木小次郎に関する箇所を意訳

一方、小次郎は蘇生したという記録も残っています。豊前小倉藩の家老による史料『沼田家記』によると、小次郎は武蔵が島を立ち去った後に息を吹き返し、その時、武蔵の弟子たちが小次郎にとどめを刺したと記されています。

様々な史料や伝承の中の小次郎は、謎が多いゆえに、そのどれが本当の実像に近いのかと想像をかき立てて、今も多くの人々を魅了し続けています。

※雌雄を決する…戦って勝敗を決めること。

check  
for

### 佐々木 小次郎



村上元三『佐々木小次郎』講談社  
川口素生『佐々木小次郎』アーツアンドクラフツ  
『特集 武蔵と小次郎の真実』新人物往来社  
吉川英治『宮本武蔵』新潮社  
池波正太郎ほか『剣聖』新潮社  
浜野卓也『佐々木小次郎』PHP研究所  
森本繁『岩柳佐々木小次郎』新人物往来社  
高橋義夫『佐々木小次郎』集英社



言い伝えの中には、小次郎に妻がいたという話もあり、キリシタンであった妻が迫害を逃れ、小次郎の遺髪を抱いて山中に入り、正法寺（山口県阿武郡阿武町）で尼となり墓を建て、夫の冥福を祈ったとされます。同地には「古志らう」と記された墓があります。

# 橋本 長兵衛

?~1625年

武将たちに好まれた鷹狩の鷹図を  
精巧な筆致で描いた敦賀の鷹絵師。  
初代と二代の鷹図は「敦賀鷹」や  
「長兵衛鷹」と呼ばれ人気を博した。



## 鷹の絵を専門に描き、人気を博した敦賀の絵師

桃山時代から江戸時代前期にかけて、三代にわたって鷹の絵を描いた鷹絵師が敦賀で活躍していました。とくに初代長兵衛と二代長兵衛は、自然界の鷹の姿ではなく、鷹狩に用いる鷹が脚に繋ぎ緒をつけて架(台木)にとまる「架鷹図」と呼ばれる絵を得意とし、その絵は武将の勇猛果敢な機運と相まって人気を

博しました。

初代長兵衛は敦賀中橋町に住み、敦賀を治めた蜂谷頼隆から「橋本」の姓を贈られたとされます。しかし、初代と二代はともに謎の多い人物とされ、子ども時代のことや人物像などを知る手がかりが残っていないため、何もわかっていません。

episode  
1

## 「敦賀鷹」と呼ばれた鷹の絵の人気ブランド

幕末に書かれた『敦賀志』という敦賀の地誌には、こんな記述が見られます。「橋本某の先代長兵衛は鷹の画をよくせり。世に敦賀鷹と称せり」。長兵衛が描く鷹の絵は「世に敦賀鷹と称せり」と表現されるように、大名や富裕な商人がこぞつて求めた人気ブランドでした。

では、それほど人気を博した鷹絵師が、なぜ敦賀にいたのでしょうか。長兵衛の絵を所蔵する敦賀市立博物館の『近世敦賀の幕開け〜吉継の治めた湊町〜』が、その背景をわかりやすく解説しています。

一説に、敦賀は仁徳天皇の時代に大陸から初めて鷹が持ち込

まれた地とされ、『養鷹記』には「百済国発使者曰。献鷹犬於我國。海舶到越州敦賀津」、また『鷹経辨疑論(上)』には「摩訶陀國ヨリ越前國敦賀ノ津ニ着」とあり、当地の「庄町」の命名も「兄鷹」が伝えられたという故事から名付けられたといえます。

このような伝承をもつ当地には、「長兵衛鷹」の愛称で知られる橋本長兵衛による作品が遺されています。(中略)

出自については明らかではありませんが、初代・長兵衛はめまぐるしく領主が変わる近世初頭の敦賀において突如彗星のごとく現れ、求めにより多くの鷹画を描きました。地方で活躍した画師でありながら、その鷹画には妙心寺第百五世の海山元珠をはじめとする京都五山の僧による賛文が施されています。ま

(県内) 敦賀市



## 日光東照宮に奉納された二代長兵衛の鷹図

た驚くことに、鷹画を得意とした美濃の土岐氏や、画壇の覇者であった狩野派等のそれと比べても遜色ありません。（中略）  
敦賀郡司・朝倉教景（宗滴）は、鷹を繁殖させて雌雄一羽の鷹を得ることに成功したといい、この出来事を『養鷹記』にまとめました。鷹の繁殖についてはこれが最古ともいわれ、その内容も枯木を伐採して室内に挿したり、鷹巢を作って養育したなどあり、なみなみならぬ鷹への執着がうかがえます。  
《敦賀市立博物館編『近世敦賀の幕開け〜吉継の治めた湊町〜』より》  
また、大正4（1915）年に発行された『福井県敦賀郡誌』は、初代長兵衛について、次のように解説しています。

二代長兵衛は、小浜藩主の酒井忠勝さかいただかつが日光東照宮に奉納した鷹図の扁額へんがくと屏風を描いたことでも知られます。制作の際には、忠勝が江戸から国元の老臣に十数回にもわたり細かな指示を書き送っています。

日光へ奉納する鷹の絵は、架鷹を描かせよ。額に用いる板は、末代までのことだから反らないように端食はしむきを入れ、用材も良質のもの求めて、上手な大工に申し付けよ。絵師の言うように、漆の上に直接描けないならば、絵師の判断に任せよ。絵の周囲には金箔を置き、裏は布を着けて上を漆で塗らせよ。表も下地に漆を二度三度塗らせた上に金箔を置けば強度が増すであろう。

《『小浜市史』「酒井家文庫」より意訳》

時の敦賀城主蜂谷頼隆はちやうらたかは、敦賀に「鷹学者」がいることを知り、その講義を聞き大いに感じて「橋本」の姓を贈ったという。この鷹学者が初代長兵衛であったと考えられている。

《山本元著『福井県敦賀郡誌』より要約》

戦後時代の三英傑えいけつ、織田信長も豊臣秀吉も鷹狩を好み、とくに徳川家康は無類の鷹好きでした。家康は領地の視察などの際に、大規模な鷹狩を計画したとされます。ところが鷹狩を行える資格を大名以上に制限したために、小さな藩では鷹狩ができず、鷹好きの殿様は絵でしか鷹を楽しめなくなりました。そうしたことから、写実的で生き生きとした敦賀の架鷹図に、人気が集まったと考えられています。

長兵衛は指示に応じて絵を描きあげ、その絵に満足した忠勝は、画料として銀子15枚（金15両）を与えよと国元への手紙で伝えていきます。

しかし、長兵衛一族による鷹の絵は、次の三代目を最後に途絶えてしまいます。5代將軍徳川綱吉つなよしによる「生類憐みの令」しょうるいあわれみの令が発布されたことで鷹狩が休止となり、鷹狩を象徴した「敦賀鷹」は、描くことができなくなったのではないかと考えられています。

※地誌：地域の自然や地理、歴史などを研究・記述した書物。  
※端食：反りや合わせ目のはがれを防ぐため取りつける細い木。

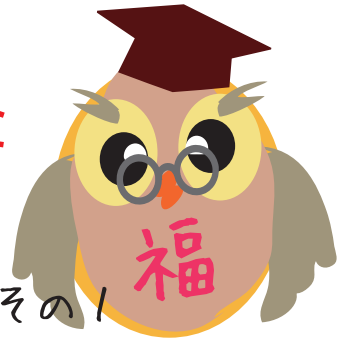
### check for 橋本 長兵衛



『幻の敦賀鷹絵師・橋本長兵衛』敦賀市立博物館  
『近世敦賀の幕開け ～吉継の治めた湊町～』敦賀市立博物館  
『福井県史』通史編3近世一 福井県  
『敦賀市史』敦賀市



鷹狩には4種類ほどの鷹が飛び方などに合わせて使い分けられました。例えば、直線的に飛ぶオオタカは手に据えたまま獲物に近づいて放し、小回りが効くハイタカは、林の中で用いられました。そうした鷹の種類や年齢にあわせて、鷹を繋ぐ緒の色や形状も決まっています。鷹図の緒の違いに注目して鑑賞するのも面白いかもしれません。



いっしょに考えよう

## 福ろう博士の 先人の力って なんだろう講座 その1

「諸君は福井県の先人というと、誰を思い浮かべるかな。その人物はこの本の中に登場しておるかな。この本では、福井県ゆかりの多くの先人の中から100人に絞って紹介しておるが、スゴイコトを成し遂げた「スゴイ先人」は、ここに載っている限りではない。先人を研究しておる吾輩としては涙をのんで絞ったというわけじゃ。

そもそもスゴイコトを成し遂げた「スゴイ先人」は、いったい何が「スゴイ」のか、この本を通していっしょに考えてみようではないか。「偉人」という言い方もあるが、偉い人という観点ではなく、我々と同じようにこの福井県に暮らし、同じ山や川を眺めて生きて人々として捉えてみよう。

この世にオギャーと生まれた時は、みんな普通の人だった。様々な出来事を経験し、様々な人に会い、その影響を受けて、人はそれぞれの人生を歩いていく。先人たちは、そうした人生の様々な局面で、どう感じ、どう考えて行動したのか想像を巡らせてみよう。昔の人物であってもグッと身近な存在になるのではないかな。諸君の住んでいる地域に「スゴイ先人」の足跡が残されていることも多いのじゃ。そうした声なき語り部にも注目してみてもどうか。また、普段の暮らしの中で、コツコツと積み重ねたことが、後に高い評価を得た先人も少なくない。例えば、毎日、丁寧に日記を書き、福井城下の様々な出来事を知る手がかりを残してくれた人物もおる。ここではその橋宗賢について紹介しよう。」

### 「普段の暮らしの中から生まれた「先人の力」 福井城下の様子を現代に伝える日記

「福井城下で医者をしていた橋宗賢は、江戸中期の18年間にわたる出来事を書き留めた「橋宗賢伝来年中日録」を残しておる。そこには藩主や藩士に関すること、騒動や処罰、気象や自然、災害、経済に関することなどが書かれており、現代の我々が当時を知る上で大きな手がかりとなっているのじゃ。」

### 橋宗賢の日記

#### 「橋宗賢伝来年中日録」より

#### 【江戸時代】

日記の中にある芝居などの興行に関する記述は、開催された場所や料金、出し物、その当たり外れなども書き留められています。芝居や浄瑠璃、能、相撲などが、庶民の娯楽として定着していったことがわかるだけでなく、興行の記述からも、飢饉をはじめ、様々な出来事が浮かび上がってきます。天明の飢饉については、天明3（1783）年の様子を伝える箇所です。「この年、不作となり米の価格が高騰したため、城下の人々は困窮し、それによって盗賊などが増え、道で剥ぎ取られる通行者も多い。近頃にない大凶年である」と記されています。

また、1770年頃に福井の空で見た彗星や流星などの記録があり、真っ赤なオーロラが現れたことも記されていました。当時の人々は見たこともないオーロラを見上げて、どんなに驚いたことでしょう。その空の様子を宗賢は絵にしており、そのページは、紙の上半分を真っ赤に塗り潰しています。

日記を残した宗賢は橋家の第23代目にあたり、その祖先は奈良時代の官人・歌人として知られる橋諸兄にまでさかのぼります。その後、平安時代に越前国木田庄に移住したとされ、室町時代の初めには、武士をしながら商人を兼業し、橋屋の屋号を名乗るようになっていきました。また、宗賢より後の人物を見ると、幕末に活躍した歌人の橋曙寛が一族の中にいます。

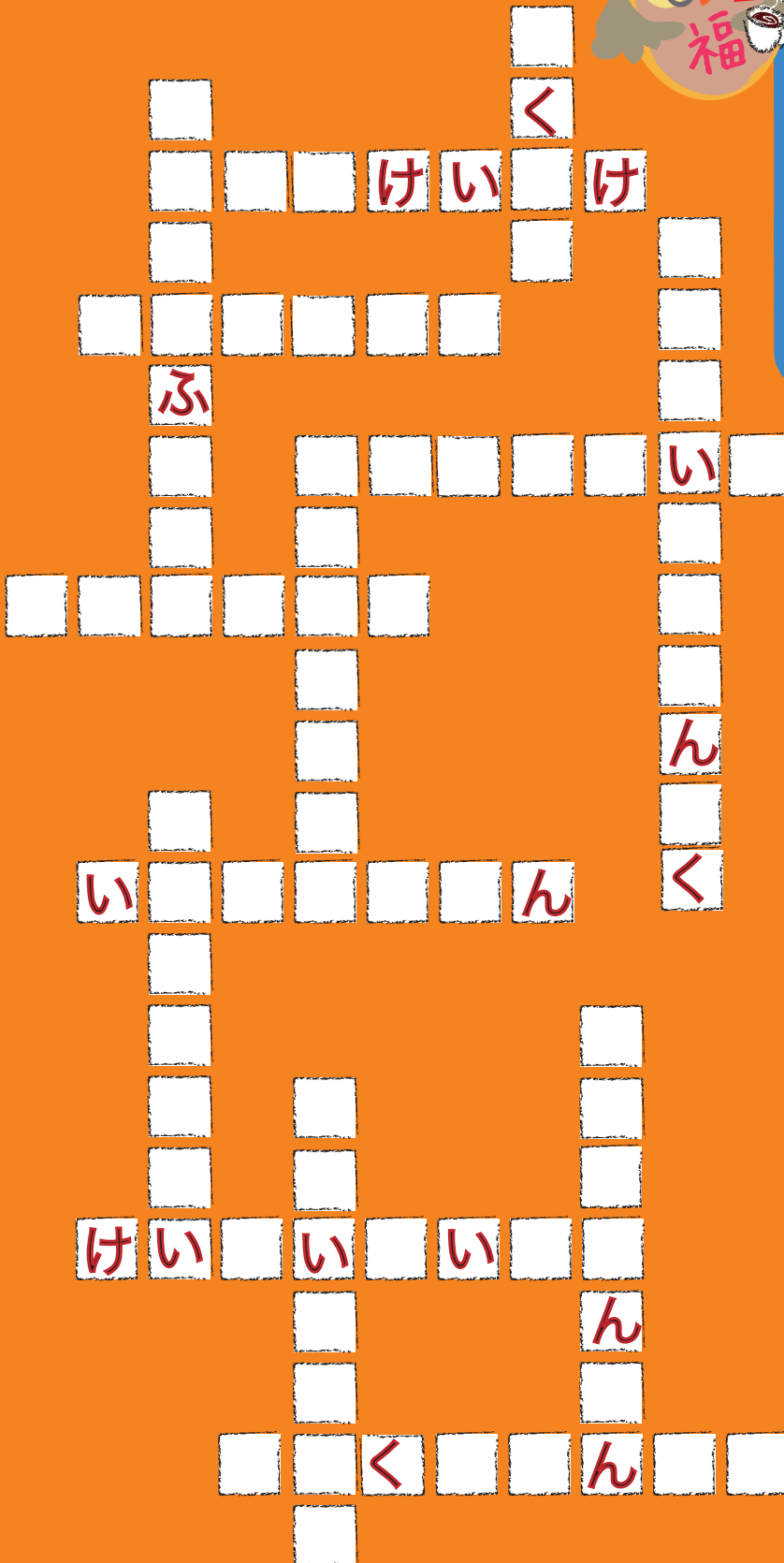




すでにマスに入っている  
**ふくひびん**を  
 手がかりに縦と横の  
 マスを福井県ゆかりの  
 先人の名前で  
 埋めてゆくのじゃ。

## 福井県の先人 スケルトン クイズ

正解はP114



この本の目次を見ればノーヒント  
 で解くこともできるじゃろう。し  
 かし、一応ヒントも出しておこう  
 かのう。

ここに登場している人物に関係の  
 あるキーワードを下に並べておる。  
 ただし、上から順番になっている  
 わけではないぞ。どこに入るかは  
 自分で見つけるのじゃ。

- ・「五箇条の御誓文」の草案作成
- ・越国出身の天皇
- ・日本の地震学の父
- ・安政の大獄で捕縛された元小浜藩士
- ・幕末の福井藩主
- ・女子教育の私学校を創設
- ・食育を提唱
- ・東京美術学校を創設
- ・小浜藩の初代藩主
- ・啓発録を著す 安政の大獄で処刑
- ・茶々、初、江の母
- ・織田信長の家臣 越前北庄城で自刃
- ・二・二六事件で標的とされた首相
- ・東洋学者 漢字の成り立ちを解明

# 岩佐 又兵衛



1578年～1650年

江戸初期を代表する**絵師**。  
戦国武将の子に生まれるが、幼い時に落城。  
独自の画風を開拓し  
現在、**国の重文**※として残っている作品も多い。

どんな子だった？



## 信長に攻められ落城した戦国武将の子

天正6（1578）年、又兵衛は、摂津国伊丹（兵庫県伊丹市）城主の荒木村重の子として生まれました。父の村重は織田信長の配下になりましたが、突然、信長に対して反旗を翻したため、信長の総攻撃を受けます。村重は城を逃れることができませんでした。残った一族や妻子は、ほとんどが処刑や皆殺しにされています。

まいます。そうした中で、2歳の幼い又兵衛は乳母に救い出され、石山本願寺（一説には京都の本願寺派の寺院）に匿われて生きのび、一方、父の村重は毛利へ逃れ、本能寺の変で信長が亡くなると、堺（大阪府堺市）に出て千利休とも親交を持つ茶人となりました。

episode  
1

## 又兵衛の成長と越前北庄の僧心願

父荒木村重の城が信長に攻められ、落城する間に救い出された又兵衛は、その後、本願寺に匿われて成長します。又兵衛の生涯については史料が少なく、謎の多い人物ですが、後に福井と深い繋がりを持つ原点となったのは、その本願寺時代にあったとされます。

この時、又兵衛は二歳であった。彼は父と別れ、母や親族を失い、幼くして悲運な人生を背負うことになった。その又兵衛をひそかにかくまい、手厚く養育したのが、越前北ノ庄（福井市）の本願寺派興宗寺住職一〇世の心願であった。

心願は一五七八年（天正六年）ころ、本願寺教団の仕事で京

へ上っていた。又兵衛にとって、この心願との出会いが、その後の人生を大きく変えていった。心願は、又兵衛にとって終生の恩人で、又兵衛の成長とともに、次第に親密な人間関係が積み重ねられていった。こうした心願と又兵衛の出会いがあったことで、彼は越前の地を選び、心願の住む北ノ庄へ移住することになったのである。のちに興宗寺（福井市松本三丁目）は、岩佐家代々の菩提寺となった。（中略）

僧心願は、幼い又兵衛に同情して、丁寧に養育した。仏教、和漢の古典文学、詩歌、茶道など、はば広く教育を行い、村重の遺子にふさわしい教養を身につかせた。そのことが、後の又兵衛の芸術の上に、彼本来の豊かな知識からかもしだされる



（県内）福井市

（県外）兵庫県伊丹市 滋賀県大津市石山  
京都府京都市 東京都

独創的な作風を築くのに役立った。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第6集より》

成長してからは、信長の次男信雄のぶかつに小姓こしやうとして仕えますが、信雄が羽柴はしば（豊臣）秀吉の怒りを買って改易かいぎとなったため、又兵衛は職を失います。しかし、浪人となったその時期、本願寺に

## episode 2

# 多くの優れた作品を描いた福井での20年間

又兵衛の作品には、北庄城下に住んだ時代のものも多く、代表作の一つ「金谷かなや（屋）屏風びやうぶ」（福井県立美術館・東京国立博物館などに分蔵）も福井で描かれました。金屋家は鉄の売買を独占するかたわら金融業も営む豪商でした。小説『怨念の絵師岩佐又兵衛』では、屏風絵を描き終わり、金屋家の人々に披露した下りがこう書かれています。

又兵衛は落ちつかなかった。このそわそわは、あの「豊国祭礼図」のときは違っている。祭礼図は、熱狂的祭事を写すという、いわば記念絵である。

ところが今度の屏風絵は、又兵衛の技術と世界を網羅したもので、注文者の意向を汲んだものではない。それを忠直がどう評価するかだ。（中略）

箱からとり出された屏風は、それからゆつくりと丁寧に職人たちによって広げられた。

《中島道子著『怨念の絵師岩佐又兵衛』より》

また、『福井県史』では又兵衛について、このように解説しています。

寄宿しながら狩野派かののうに師事したことが、彼の絵師としてのスタートとなったのでした。

そして、又兵衛の絵の評判は北庄にも伝わり、福井藩に招かれて北庄城下に移り住み、20年あまりを同地で過ごすことになります。

当時は狩野派全盛の時代になっていたが、又兵衛は「土佐光信末流」と自称し、土佐派はもとより狩野派・海北派・雲谷派の影響を受けながらも、自由な立場から独自の画境を開拓していた。ことに人物表現には顔に「豊頬長頤ほうきょうちやうい」といわれる特色がみられた。その画風には諧謔性かぎやくと憂愁が秘められており、波瀾はらんに富んだ奇異な人生体験が反映している。又兵衛の名声は江戸にも達し、寛永十四年（一六三七）將軍家御用によって妻子を福井に残して出府、慶安三年（一六五〇）江戸にて没した。

《『福井県史』通史編3近世一より》

北庄城下の工房には、多くの画工がいたと考えられており、又兵衛が江戸に出た後、工房を受け継いだ息子も父同様に福井藩のお抱え絵師として活躍しています。

※重文：重要文化財の略。建造物・絵画・彫刻・工芸品・古文書などの有形文化財のうち、歴史的または学術的に価値が高いと考えられる重要なもの。文部科学大臣が指定。

## check for 岩佐 又兵衛



辻惟雄 『岩佐又兵衛 浮世絵をつくった男の謎』文藝春秋  
砂川幸雄 『浮世絵師又兵衛はなぜ消されたか』草思社  
中島道子 『怨念の絵師 岩佐又兵衛』河出書房新社  
小笠原京 『爛漫の時代 浮世又兵衛物語』新人物往來社  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第6集 青少年育成福井県民会議  
『岩佐又兵衛展』福井県立美術館  
『岩佐又兵衛 伝説の浮世絵開祖』千葉市美術館  
『福井県史』通史編3近世一 福井県  
『図説福井県史』福井県  
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立子ども歴史文化館



「金谷（屋）屏風」は、六曲一雙の屏風の一枚ずつに絵を貼ったもので、現在は12枚の絵のうち10枚が軸装されて残り、東京国立博物館や福井県立美術館等に分蔵されています（残りの2枚は所蔵者不明）。六曲一雙とは6つに折り畳む屏風2組で1セットということです。

# 住友 政友



1585年～1652年

丸岡（坂井市）出身。住友の初代。  
涅槃宗の僧を経て商人へ。  
薬と出版の店を出発点に  
日本屈指の豪商住友の基礎を築く。

どんな子だった？



## 12歳の時、親の信仰する涅槃宗の僧門へ。

政友は、天正13（1585）年、住友政行の次男として越前国丸岡（坂井市丸岡町）に生まれました。祖父は柴田勝家に仕え、勝家とお市の方が北ノ庄城（福井市）で自刃した際、勝家らと運命を共にして自刃。また、父は、一説によれば丸岡に五千石を領したとも、**結城秀康**に仕えたとも言われます。

政友は12歳のころ、母と弟とともに京に移り住み、涅槃宗の開祖空源入門。仏典を熱心に学び、空禅の名と文殊院の号を授かり、空源の片腕として布教活動に励みます。ところが、涅槃宗が弾圧を受けたことで、僧として生きるはずだった政友の人生は、大きな転換を余儀なくされるのでした。

episode  
1

## 僧から商人へ、そして屈指の大商人へ

政友が僧籍に入った涅槃宗は、朝廷の帰依を受け、また、多くの信者を得て急激に成長した新興の宗派でした。それが他の宗派の反感を買って弾圧を受け、徳川幕府の宗教政策とも相まって天台宗に統合されてしまいます。涅槃宗を深く信仰する政友は、無宗派の僧となった後、富士屋嘉休と名乗って薬種商と書林（出版業）を開業しました。政友が45歳から46歳頃のことといわれます。

これが後の明治期に財閥を形成し、そして、現代の日本を代表する企業グループ住友の初代となった政友の商いの始まりでした。政友が出版した本で今に残るものには、「往生要集」（比叡山

横川の僧源信による仏書）や「御成敗式目」（鎌倉幕府が制定した法典）など、たいへん貴重な書籍があります。また、薬種商としては、万病薬として有名な「反魂丹」（腹痛などの薬）の看板が残っています。

そしてもう一人、住友家には草創期の商いを語る上で、欠かせない人物がいます。政友の姉婿にあたり、信仰においては政友の弟子のような存在であった蘇我理右衛門です。政友と理右衛門は車の両輪のように、共に住友家をもり立てました。

理右衛門は、泉屋という店を起こし、銅から銀を分離する精錬技術「南蛮吹き」を開発すると、その技術を公開して大坂（現在の大阪）に根付かせました。これにより大坂は日本の銅精錬



（県内）坂井市  
（県外）京都府京都市

業の中心となります。

また、理右衛門の息子の友以は、政友の養子（娘婿）となつて住友家を継ぎ（住友家二代目）、精錬の事業だけでなく銅の貿易業をはじめ、糸や反物、砂糖、薬種などを手がける貿易商としても成功していきます。

episode  
2

## 受け継がれた商いの精神「文殊院旨意書」

少年期に涅槃宗の教えを受け、その教義を心のよりどころとしてきた政友は、商いを起こした以降も、教義を生き方の指針として真摯な態度で商いに臨んだことがうかがわれます。晩年の政友が店の奉公人に宛てた書状「文殊院旨意書」には、冒頭文と五つの項目にわたり、次のような商売の心得が記されています。

- 商事は不及言候へ共、万事情二可被入候、
- 一、何二而もつねのそうばよりやすき物、持来候共、根本をしらぬもの二候ハ、少もかい申間、數候左様之物ハ盗物と可心得候、
- 一、何たるものにも一やのやともかし申まし、又あみかさにてもあつかましく候、
- 一、人のくちあいせらるましく候、
- 一、かけあきないせらるましく候、
- 一、人何やうの事申候共、氣ミしかくことはあらく申ましく候、
- 何様重而具二可申候、已上、

この心得の冒頭文には「商売は言うに及ばず、何でもすべてこのことに心を込めて丁寧慎重に励むように」と、商売人である

後に日本屈指の豪商となる住友家の事業は、こうして同じ信仰の精神で結ばれた初代の政友と理右衛門の二人によって、その礎が築かれたのでした。そしてさらに、経営においては、後の世に渡るまで、政友の商いに対する精神が受け継がれていくこととなります。

前に人としての大切にすべき心がけが述べられています。そして、続く項目では、いくつかの例を挙げて信用を重んじた誠実な商いを奨励し、最後に人と接する際の心構えが記されています。また、この他にも、「遺戒」など、門徒や家人に宛てた多くの書簡を遺しており、「正直、慈悲、清浄」を基本に、神仏を敬い、事に当たっては慎重確実を旨とし、儉約を怠らないことを教えています。

政友は、63歳で嵯峨清涼寺（京都市右京区）近くの庵で隠棲した後、68歳で亡くなりますが、その教えは、後の世まで住友家に長く受け継がれていきました。近代には日本の三大財閥の一つに数えられ、そして、住友グループとして日本経済の一翼を担う企業集団になった現在も、「文殊院旨意書」に見える政友の思いは、住友の事業精神の核として大切にされています。

check for

### 住友 政友



朝尾直弘（監修）、住友史料館（編集）『住友の歴史 上巻・下巻』

思文閣出版

『住友の歴史から』住友商事（株）広報室

作道祥太郎（編集）『日本財閥経営史』日本経済新聞社

竹内均『日本を造った男たち 財界創始者列伝』同文書院

財閥研究会（編集）『三菱・三井・住友「三大財閥」がわかる本』

三笠書房



第二次世界大戦後の財閥解体まで、三井、三菱、住友をはじめとする財閥（一族の独占的出資による資本で運営された巨大な企業集団）が形成されていました。住友政友に始まる日本最古の財閥であった住友は、財閥解体後に分社化し、銀行や金属工業、化学工業、商事会社など、多岐にわたる業種を構成する住友グループとして現代に続いています。

# 酒井 忠勝



1587年～1662年

徳川幕府の老中。酒井家小浜藩の初代藩主。幕政では将軍の信頼厚く、江戸初期、幕府の礎を固める。小浜の領民に漆塗りを奨励。

どんな子だった？



松平氏に仕える家臣の一族に生まれ、14歳で初陣を果たす

酒井氏は、三河国（愛知県東部）を本拠とする松平氏に代々家臣として仕えてきました。そうした酒井家当主の長男として、忠勝は西尾城（愛知県西尾市）で誕生。3歳の時、主君の家康が関東に入ったため、忠勝は父とともに武蔵国川越（埼玉県川越市）に移りました。

幼い頃は、周囲から愚鈍な子と見られていましたが、それは物事をしっかりと考える性格からきていたようで、のちに酒井の家臣たちは、その賢さに驚いたという逸話も伝わります。慶長5（1600）年、14歳の時には、上田城（長野県上田市）攻めで初陣を果たしています。

episode 1

## 譜代大名として厚い信頼を受け、徳川政権の礎をつくる

慶長14（1609）年、22歳の忠勝は朝廷から官位を与えられ、その5年後には、2代将軍秀忠から、下総国に3千石の領地を与えられました。また、元和6（1620）年には、徳川家光（秀忠の子）の住む江戸城西の丸に勤めます。忠勝は17歳の若い世継ぎを将軍に育てる役目を任されたのでした。その後も次々と領地を増加され、徳川家から厚い信頼を寄せられていた様子が見えます。増加にまつわる話には、第3代将軍家光とのこんなエピソードもあります。

忠勝が小浜城主となったあと、将軍家光は、いくどとなく、忠勝へ領地を増加する意向を伝えた。一度は、家康のいた駿河

国の駿府で一八万石を与えようとしたが、忠勝は、「家康さまのおられたところであり、もったいない」といって辞退し、二度目は、甲斐国（山梨県）で二四万石を与える意向を伝えるが、その時、「勇将武田信玄のかつての領国へ自分が入るのは、分不相成である」と断った。三度目、家光は忠勝が若狭の地を離れるのがいやなら、地続きの近江国高島郡と志賀郡とを増加してやろうと思ひ、使者を忠勝のもとへ送った。当時、主人の命を三度断ることとは、一つの罪であると考えられていたので、使者はこんどは増加を受けるだろうと思っていた。しかし、忠勝は、その使者

（県内）小浜市  
（県外）東京都 埼玉県 愛知県  
静岡県 滋賀県

## 老中・大老として、藩主として、幕政と藩政に力を注ぐ

に対して、  
「ただいまいただいている領地だけでも自分には過ぎたものであり、この上の加増は思いもかけないことである。また、むかしから主人にかわいがられたことだけで大きな所領を与えられたものは、おごる心が出て、その身を滅ぼした例は少なくない。自分もいつそうなるかわからない。そうなれば上様うさま（家光のこ

と）にとつても自分自身にとつてもいいことではないであろう。さらに、加増をされても、自分一代のあいだはつつしみ深くしていても、子孫がどのような不始末をするかははかり知れない」と答えた。この使者から、忠勝の話聞いた將軍家光は、忠勝の将来にわたつてのたいへん注意深い考えにたいそう感心した。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第6集より》

元和9（1623）年、家光が第3代將軍となり、翌年には忠勝が実質的な政務の中心を担う老中に就任。老中を辞めるまで15年間にわたり將軍を支えました。また、老中を辞めてからも幕政の相談役（後に大老職として定着）として登城し、家光から「我が右手」といわれるほど信頼されていました。

小浜市立図書館が所蔵する酒井家文庫には、家光が亡くなる9ヶ月ほど前に、忠勝へ宛てて書いた自筆の手紙が残り、その文面からは忠勝への厚い信頼が伝わってきます。

このたび病気になった私に、忠勝は他の人とはちがひ、心から心配してくれている。本当に満足に思う。この間の様子をみて、忠勝の気持ちがよくわかったので、すべての政治の方針について、心底から相談するから、心置きなく言ってくれ。

《忠勝にあてた家光の手紙より現代文にて意訳》

その間の寛永4（1627）年、忠勝は、川越藩の第2代藩主となり、さらに寛永11（1634）年、所領の加増によって、小浜藩の初代藩主となりました。幕府の重要な職にあった忠勝が小浜で過ごしたのは、小浜藩主であった23年間のうち、合算

して1年に満たないものでしたが、忠勝は小浜の家臣と密に連絡をとり、藩の経営や飢饉きんの救済措置をはじめ、こと細かに指示を与えていました。忠勝が小浜に送った手紙は、確認されているだけでも400通を超えます。

家康から家綱まで4代にわたる將軍に仕え、家臣の中で絶大な影響力をもった忠勝。晩年は69歳で隠居いんきょした後、出家して空印と名乗り、75歳でその生涯を閉じました。

現在、小浜市には、藩主であった忠勝に由来する伝統文化が残っています。現代に続く若狭塗は忠勝が漆塗りを奨励したことから始まりです。また、忠勝が川越から若狭へ来るとき、「関東組」という獅子舞の演者を連れてきており、その舞が今でも演じられています。

※譜代大名：関ヶ原の戦い以前に徳川氏に臣従した大名。

check  
for

## 酒井 忠勝



岡村昌二郎『宰相の道』若狭史学会

『酒井忠勝と小浜藩矢来屋敷』新宿歴史博物館

『若狭小浜藩 大老酒井忠勝とその家臣団』福井県立若狭歴史民俗資料館

中島辰男『酒井忠勝私論』

『酒井忠勝に見る近世大名の姿』川越市立博物館

『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第6集 青少年育成福井県民会議

『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



忠勝は若狭国に飢饉が起こった際、領民を餓死させてはならないと、大津に送ってあった年貢米を送り戻して分け与えました。また、粥を配給させ、その中に入れる材料まで、栄養を考えて指示を出すなど、忠勝の細やかな心がうかがえます。

# 砂村 新左衛門

1601年～1667年

越前国今立郡新村を開拓した一族の一人。  
土木技術者として  
関西や関東の開拓事業を指揮したとされ  
今も東京の地名にその名が残る。



## 治水や新田開発の土木技術を持つ一族の子

新左衛門は、江戸時代の初めに、越前国今立郡砂畑村（新村）（鯖江市新町）の出身で、新村を開墾した福岡新兵衛という人物の分家の二代目といわれます。また、今立郡水落村（鯖江市水落町）に住んでいたとも伝わり、どちらの村も開拓以前は、近くの川が氾濫しやすく、よく水害に見舞われるところでした。

一族は江戸時代以前から土木技術に長けた技術者集団であったと考えられています。

新左衛門は青年になると、水落村や三国湊（坂井市三国町）の九頭竜川河口の治水事業に加わり、工事に従事しながら新田開拓の技術を習得。以降、土木の技術者として全国を巡ります。

episode  
1

## 豊かな実りをもたらす新田開発を志して

第3代福井藩主の松平忠昌の命による九頭竜川河口（坂井市三国町）の治水事業に、新左衛門は一族の者とともに加わりました。そして、工事のかたわら新田開拓の技術を習得し、全国各地に赴いたとされます。新左衛門の伝記には、土木技術者としての姿が生きて描かれています。

新村の経営は易しいものではなく、耕作地から得られる収入も安定したものではありませんでした。それは初期の開拓地にはつきものの苦勞でしたが、兄弟三人の家族を十分に養うのは大変なことでした。長男の政次改め新左衛門は早くに結婚していました。子供はできませんでした。新左衛門は農業よりも開

拓地の改良に興味を持つようになっていきます。農民ではありましたが先祖が武家だということもあってか、教養もあり研究心が盛んで、「どうすれば洪水から田畑を守るのか」「どうすれば耕作地に必要な水を安定的に確保できるのか」という、いわば現代で言う土木工学に強く興味を持っていました。

新左衛門はその後、多くの新田開拓、築地に関わりますが、その関わり方は他の開拓者とは若干異なります。各地に人名の付された新田は数多くありますが、ほとんどは出資者の名前です。新左衛門の場合は純粋に自己資金を投じて作った新田は一箇所だけでした。新左衛門は多くの場合、技術者として新田開拓に関わったのです。



（県内）坂井市三国町 鯖江市

（県外）大阪府大阪市福島区

東京都江東区南砂

神奈川県横浜市・横須賀市

新田開拓に必要な主な技術は、石垣などを組んで堤防を作る  
こと、木材石材を組み合わせて樋門を作ることでした。海岸の  
場合、これらは潮除堤とか潮除樋と呼ばれました。そのほかに  
農業用の水路を作り、そこに橋を架けたり、貯水池を作ったり  
することも技術を要することでした。

《溝手正儀著『砂村新左衛門』より》

三国で新田開拓の技術を習得した新左衛門は、その後、  
摂津国（大阪府周辺）曾根崎川の河岸で新田開拓に取り組み、  
見事に成功させます。その評判は広まり、やがて土木技術の手  
腕を買われ関東でも仕事をするようになりました。

## 田畑を増やすだけはなく、農業を育てる新田開拓

新左衛門ら砂村一族は、現在の神奈川県横浜市や横須賀市の  
新田開拓にも携わっています。横須賀の内川新田の開拓では、  
予想以上の難工事に苦勞し、災害も多かったため、新左衛門は  
天神社（久里浜天神社）をつくり、また、増水や高潮対策の堤  
防を作るなど、同地に留まって新田を守る対策にも没頭したと  
伝えられます。

開拓事業に情熱を燃やした新左衛門は、その考え方や工事の  
様子を後世に残すため、晩年に遺訓を著しました。新左衛門の  
遺訓について『丹南地域の先人に学ぶ』は次のように紹介して  
います。

その遺訓には、先ず自分が諸国をめぐり、国々所々を見て廻つ  
たがよいところの屋敷がなく、相州三浦内川の人海を新田に取  
立て住所を定めようとしたが、江戸より遠いため、結局、江戸

江戸で起きた明暦の大火の際には、靈巖寺（東京都江東区白  
河）の復興工事などに力を尽くし、褒美として新田開拓の権利  
を与えられました。その工事を進めるための資本金集めは幕府  
が行い、たくさんの出資者を集めました。新田開拓は後の大き  
な利益につながる事業だったのです。

この大規模な開拓工事によって誕生したのが、現在の江東区  
南砂周辺です。南砂は、かつて砂村という地名で呼ばれていま  
した。開拓を行った砂村一族の名から付けられた地名でした。  
また、大阪の福島区でも、上砂町や下砂町といった「砂村」ゆ  
かりと考えられる地名が、明治時代まで残っていたとされます。

深川の宝六島海辺附近を住所と定め、新しく開墾した経緯を述  
べられています。そして、色々な種を集め、草木を植え置けば、  
十ヶ年を過ぎると、自分のため、世の人のために大いに役立て  
ることが出来ると、開墾の意義や植樹の効用が記されています。  
いにしへの武人（熊谷直実、斉藤実盛）は遁世（世を捨て出家）  
したり、錦の鎧を着て討死することで名を残したが、自分は「田  
夫野人」の生れで、土地より生える種をとり集め、植え置く開  
拓こそが末代までの宝となり、子孫のためにも役立つことにな  
ろうと諭しています。（中略）

こうして新左衛門の生涯をみると、協力者や耕作者に開  
墾の意義を訴え、農民を育てる姿は、すぐれた武人本来の姿に  
も匹敵するものとして自らその手本を示していたといえます。

《鯖江ロータリークラブ発行『丹南地域の先人に学ぶ』より》

check  
for

### 砂村 新左衛門



伊藤作之助 『片鱗記』  
福岡清 『福岡新兵衛歴史のあらまし』  
溝手正儀 『砂村新左衛門』 とびら出版  
溝手正儀 『郷土の人物』 ポプラ社  
『丹南地域の先人に学ぶ』 鯖江ロータリークラブ  
永井荷風 『荷風随筆集』 岩波書店  
高橋亮三 『南越』 第三集 安田書店



東京都江東区にかつてあった砂  
村という地名について、永井荷風は  
随筆『元八まん』の中で「砂村は今、  
砂町と改称せられているが、むかし  
の事を思えば『砂村町』とでも言っ  
て置けばよかったのである」と書い  
ています。つまり、砂村が作ったの  
だから砂町ではなく砂村町としてお  
けばよかったのであると、荷風は残  
念に思っていたようです。

# 行方久兵衛

1616年～1686年

江戸時代初期の小浜藩士。  
三方郡の郡奉行を務め  
浦見川の開削を難工事の末に成功し  
大地震で水没した村や田畑を救う。

どんな子だった？



## 父とともに、藩主酒井忠勝に従って若狭国へ

久兵衛は、江戸時代の初め頃、武蔵国若槻藩（埼玉県さいたま市）に仕える行方正通の子として生まれました。久兵衛の父は浪人となって岩槻藩を離れた後、武蔵国川越藩（埼玉県川越市）藩主の酒井忠勝に召し抱えられます。その後、忠勝が小浜藩主となった際、家族を連れて小浜に移りました。こうして久

兵衛は武蔵国から若狭国にやってきたのでした。そして、28歳の時、父が病気で亡くなったため、久兵衛は父の跡を継ぎ、小浜藩士として俸禄140石を与えられるようになります。

episode  
1

## 大地震による水没、困難を極めた浦見川開削

寛文2（1662）年5月1日（旧暦）、寛文近江・若狭地震が発生し、若狭国に大きな被害が出ました。三方郡にある三方湖、水月湖、菅湖の水は、海側の久々子湖に通じる川を流れていましたが、川底が隆起したために、3つの湖の水は、せき止められてしまいます。出口を失った湖の水位は上がり、湖周辺の村や田畑が水没してしまつたのです。

復旧工事は三方郡の郡奉行をしていた久兵衛が指揮をとることになり、地震からまだ間もない5月27日、久々子湖と水月湖を結ぶ運河の開削工事にとりかかります。運河の予定地は、直線で結ぶと距離が短い浦（恨）見坂と呼ばれる峠。しかし、そこは以前にも開削の計画がありましたが、難工事のため中止と

なつた場所でした。

久兵衛は、人夫を二手に分けて浦見坂の時の両側から掘り進むことにします。しかし、当初は順調に進みましたが、工事が半ば近くまでできた頃、南側で大きな岩盤に突きあたり、難工事に陥ってしまいました。そして、久兵衛がその打開策を考えているうちに、北側にも岩盤が現れ、完全に行く手がふさがれてしまいます。近くの村々から工事にかり出されていた人々は、苛立ち始め、やがて久兵衛を罵るようになりました。この時の不満を歌詞にした数え歌が今に伝わっています。作業をしながら口ずさんでいたのでしょうか。不満を歌で晴らしながら作業の音頭をとる労働歌のようです。



（県内）若狭町  
（県外）埼玉県さいたま市・川越市

一つとや、ひとかたならぬ浦見坂、なにが御普請、ソリヤソウサ。  
（いくら藩主さまが命じられた御普請だからといって、浦見坂を切り通すなんて、ひとかたでない。いったい何が「御普請」だ。）  
二つとや、ふたたびいやな浦見（恨み）坂、名を聞くだにも、ソリヤソウサ。

（ああ、ああ、またいやな恨み坂の工事が。名を聞いただけでもうらめしくなるよ。）

## あきらめかけた時、不思議なお告げが…

固い岩盤に遮られた工事は、なかなか進まず費用もかさみ、ついに藩が工事の中止を考えるとところまできてしまいます。しかし、それでも久兵衛はあきらめませんでした。越前から鋳夫を呼び寄せ、また、京都から技術の高い石工たちを呼び寄せるなど、あらゆる手を尽くすのでした。そんなある日、久兵衛は不思議な夢のお告げを受けます。そのお告げとは…

工事を投げ出そうとする者がいるなかで、久兵衛は困り果て、今はもう上瀬の神（福井県三方上中郡若狭町気山の宇波西神社）にすがると、夜な夜な神社に詣でて心を込めて神に祈りを捧げました。すると、ある夜、眠っていた久兵衛は「少し北に寄せて掘るならば……」

という夢のお告げを受けます。そこで急いで人夫を呼んでこの出来事を伝え、

「夢を疑わずに頑張ってくれ」

と諭します。人夫たちが半信半疑に思いながら、しびしび工事に取いかかると、不思議なことに、お告げのとおり工事がはかどり、ついに9月17日、狭いながらも一筋の水路を開くこと

三つとや、右も左も岩山の、なかなか御普請、ソリヤソウサ。  
（右も左も岩山ばかりだ。御普請といたって、なかなかはかどるものか。）

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈』第4集より》

こうした不満を述べる歌詞が延々と20番まで続いています。

ができました。

《行方久兵衛翁頌徳会編『行方久兵衛翁小傳』より現代文にて意訳》

こうして浦見川（運河）は2年の年月と膨大な費用、のべ22万5300人という人々の手によつて完成。湖畔の村々や田畑が元に戻っただけでなく多くの干潟ができ、新田開発が進められることにもなりました。久兵衛はこの完成を上瀬の神に感謝し、2反（約20アール）の田地を社領として寄進するよう取り計らうとともに、自らも石の手水鉢を寄進しました。今も宇波西神社に残る手水鉢には、工事の記録と久兵衛の思いが刻まれています。また、開削された浦見川岸を上つていくと、当時の岩盤を今も見ることができます。

※郡奉行：江戸時代、各藩の郡などの地方行政にあたった職名。農民の管理や徴税・訴訟などを扱う。

※社領：神社の領地。

### check for 行方 久兵衛



『行方久兵衛翁小傳』行方久兵衛翁頌徳会

永江秀雄『若狭の歴史と民俗』雄山閣

『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第4集 青少年育成福井県民会議

『福井県史』通史編4近世二 福井県

『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



久兵衛が三方湖、水月湖、菅湖の排水路となる浦見川をつくったことにより、湖辺に約400石の新田が拓かれました。若狭町の生倉、成出の集落など新しい村が生まれ、その名は「米がいくら（生倉）でもなるで（成出）」との願いを込めて命名されたとも伝わります。

# まつのき しょうびん えもん 松木 庄左衛門

ちようそう  
(長操)



1625年?~1652年

16歳で庄屋になり、年貢引下げを嘆願し、投獄され磔の刑となるが悲願は叶う。後に若狭の義民と呼ばれて敬われ大豆の神として祀られた。

どんな子だった?



## 16歳で庄屋を引き継いだ庄左衛門

庄左衛門は、江戸時代の初め、若狭国遠敷郡新道村(若狭町新道)に生まれたとされます。新道村は北川の支流沿いであり、平地が少なく米が作りにくいため、主に大豆をつくる集落でした。庄左衛門の幼い頃の名はわかっていますが、16歳のとき、庄屋を務めていた父が亡くなったため、松木家を継いで庄左衛門を名乗るようになったと考えられます。

その頃、小浜藩の農民は重い年貢(税)に苦しんでいました。若狭の庄屋たちは、年貢を何とか軽減してもらおうと、藩に願い出ることを決めます。その代表に選ばれたのが、16歳で庄屋になったばかりの庄左衛門でした。以降13年にわたり、庄左衛門は決意を曲げずに、命をかけて嘆願を続けたのです。

episode  
1

## 小浜城の建設のために、過酷な年貢を課せられた農民たち

若狭地方では、庄左衛門のことを「若狭の義民」と呼び、長く敬愛してきました。義民とは民衆のために身を捧げた人という意味です。江戸時代、年貢に苦しむ農民の代表となって、命がけで年貢の軽減を願った義民の話が、全国に伝わります。当時、それは死罪となるほど重い罪でした。

小浜市に残る酒井家の史料には、慶安5(1652)年5月16日の項目に、遠敷郡新道村の庄左衛門、松木長操を遠敷郡の日笠河原で斬ったという一文があります(長操は戒名。処刑後、日笠村正明寺に葬られ、戒名の松木長操居士を授与)。

苦しむ農民を救うために死罪となった庄左衛門。その伝記は江戸時代の逸話集などに綴られ、明治時代には『松木長操氏之

伝記』として後世に伝えられます。

関ヶ原の戦いの後、若狭国の領主となった京極高次は、小浜城の築城を始めます。小浜藩はその費用をつくるために、1つの俵に入れる大豆の量を4斗から4斗5升あるいは5斗に引き揚げて年貢を徴収しました(斗・升は体積の単位)。農民は城の建設にかり出されている上に、過酷な年貢を課せられ、苦しい生活を強いられました。領主が酒井忠勝に代わった後も、税率は下がらず、重税に苦しむ農民の怒りは、年を追って若狭地方に広がっていききました。

寛永17(1640)年の秋、若狭252か村の庄屋らは、これ



(県内) 若狭町 小浜市

を何とかしようと会合を開きます。庄左衛門もその中にいました。しかし、集まった人々が口にするのは役人の悪口ばかり。話がいっこうに進まないのを見かねた庄左衛門は、末席から古老が並ぶ前に進み、謙虚な姿勢で意見を述べました。一同は、そのしつかりとした意見に感心し、16歳の庄左衛門を総代にした20名余りが代表に選ばれ、藩に嘆願書を出すことが決まります。庄左衛門らは、農民の悲惨な現状を訴え、慈悲を乞う嘆願書を役所に出しますが、役人は怒り出してそれを突き返す始末。庄左衛門らはあきらめずに嘆願を続けますが、9年目のこと、代表者たちは投獄されてしまいます。その間の嘆願は数十回に

## 若狭の義民として崇められ、

藩主の忠勝は、後に庄左衛門の処刑について、領地を治める中で「三度、非道なことをしたが、松木の処刑も、その一つであった」と語ったという話が、小浜藩の家臣が書いた記録に残っています。また、嘆願が聞き入れられたことについては、願いの筋も道理に叶っているため、今後の押さえのため罪に落としたが、申し出の通りに年貢の引き下げを許したのであると記しています。

幕府の老中を務めていた忠勝は、江戸で庄左衛門の話を聞き、今後、藩に背く者が出ないようにと重い罰に処しますが、年貢については、庄左衛門の願いを聞き入れて、1俵につき4斗に戻します。忠勝は、その少し前の寛永19（1642）年と翌年の大飢饉の際、若狭の救済に力を注いでいました。そうしたことから、若狭の農民の現状を察することができたのでしょう。また、一度は死罪の命令を出したものの、立派な志を持つ者は藩の役に立つと考え、処刑を中止させる手紙を急いで藩の家

も及び、役人は再び嘆願をさせないために威しをかけたのでした。そして、捕えた者たちを威したり諭したりして悔い改めさせようとしています。仲間たちは、次々に志を捨てて牢屋から出されますが、最後に一人残った庄左衛門は、耐え続け、ついに慶安5（1652）年、日笠河原で磔の刑に処せられます。そして、その死と引き換えに、庄左衛門の願いは小浜藩主の酒井忠勝によって、ようやく聞き入れられたのでした。庄左衛門28歳のときのことでした。

《福井県遠敷郡熊川村役場編『松木長操氏之伝記』より意訳》

## 大豆の神様となった庄左衛門

老に出しますが、処刑には間に合わなかったとも伝わります。16歳から28歳で死罪となるまで信念を貫き通し、命にかえて農民を救った庄左衛門。近隣の農民たちは、その墓に大豆を手向けて弔い続けたといわれています。さらに処刑から100年ほど後に五輪塔ができ、その後も近隣集落の寺に菩提碑ができるなど、庄左衛門は農民の恩人として、人々の心の中に生き続けていきます。

昭和になっても、その心は途絶えることがありませんでした。若狭の農家では、その年に初めて収穫した大豆を神棚に供える習慣になっていました。感謝の気持ちが信仰と結びつき、大豆の神様として崇めるようになっていたのです。昭和初期には、庄左衛門を祀る松木神社（若狭町熊川）が建立されるなど、今も若狭町のあちこちに、庄左衛門の遺徳をしのばせる場所が点在しています。

check for

### 松木 庄左衛門

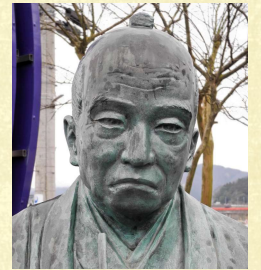


『松木庄左衛門 大老をも動かした若き義民』上中町教育委員会  
永江秀雄『松木庄左衛門』松木神社奉賛会  
河村仁右衛門『若狭の義民』松木神社奉賛会  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第6集 青少年育成福井県民会議  
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



こぼれ話  
役人が庄左衛門を捕縛にきたとき、母に話を聞かせていた庄左衛門は、終わるまで待つように頼み、そして、動揺した様子もなく話を終わったといわれています。いつでも捕まる覚悟ができていた庄左衛門の最後の親孝行だったのでした。

# 近松門左衛門



1653年～1724年

上方歌舞伎の全盛を招いた歌舞伎作者。  
時代物や世話物で人気を博した浄瑠璃作者。  
「国性爺合戦」「曾根崎心中」「心中天網島」など  
後世に残る数々の傑作を生む。



## 北庄で生まれ、鯖江で多感な少年時代を過ごす

門左衛門は、杉森信義の次男として北庄（福井市）で生まれました。父は第3代藩主松平忠昌に仕えた後、その三男で吉江藩（鯖江市吉江町）藩主となった昌親の養育係をしていました。明暦元（1655）年、北庄に住んでいた昌親が吉江に移ったため、杉森一家も吉江に引っ越し、そして、

その10年ほど後には、父が吉江藩を辞め、一家は京都へ移り住みます。門左衛門は、幼児期から多感な少年時代まで、10年間に鯖江で過ごしたのです。  
門左衛門の本名は杉森信盛、子どもの頃は次郎吉と呼ばれ、作家となつてから近松門左衛門を名前としました。

episode  
1

## 京都の公家の奉公人から、浄瑠璃作家の道へ

門左衛門の生涯は、その作品が発表された年などがわかる程度で、謎の多い人物とされます。わずかに手がかりとして残るものでは、19歳の頃に作つたとされる句が、江戸時代前期の俳人、仮名草子作者として知られる山岡元隣（やまおかげんりん）の俳諧文集『宝蔵』に見られます。

しら雲やはななき山の恥かくし  
《山岡元隣著『宝蔵』より》

同書には父や曾祖父、弟の句もあり、京都に移り住んだ杉森一家は、揃って文芸に親しんでいたようです。

また、門左衛門は公家の一条惠観の屋敷に奉公し、そこで浄瑠璃と出会います。浄瑠璃とは、物語を三味線の伴奏に合わせ

て語り、人形を使って演技させるもので、恵観は自分で浄瑠璃の台本を書くほどの愛好者でした。門左衛門は折りに触れ浄瑠璃の世界を垣間見て、次第に浄瑠璃に魅了されていったのでしよう。恵観は、ほどなく亡くなつてしましますが、門左衛門は次の奉公先として、やはり浄瑠璃好きで知られる公家の正親町公通の屋敷に入ります。江戸時代後期の随筆『翁草』によると、文芸に秀でる公通は、趣味で浄瑠璃の台本を作っており、当時人気を博した浄瑠璃一座の宇治嘉太夫（かたじょう）に、作品を見せました。それを門左衛門が主人の使いとして嘉太夫に届けているうちに、台本づくりまでも門左衛門が手伝うようになり、次第に浄瑠璃にのめり込んだとあります。

（県内）福井市 鯖江市  
（県外）京都府京都市 兵庫県尼崎市  
滋賀県大津市

## 人の心の葛藤や情けを描いた話が大好評に

門左衛門はその後、浄瑠璃の作家を目指して、宇治嘉太夫の

もとで修行を始めることとなります。

天和3（1683）年、門左衛門が嘉太夫に書いた作品『世継會我』が大好評となり、門左衛門は、一躍、人気作家になり、嘉太夫の門下にあった竹本義太夫のための作品も書くようになりました。

その翌年には、大坂に竹本座を創設した義太夫を祝って作品をつくり、それをきっかけに門左衛門は、登場人物の個性を際立たせた物語を得意とするようになり、それまでになかった新しい浄瑠璃を發展させていくこととなります。また、その間、名人とうたわれる歌舞伎俳優の坂田藤十郎とも組んでいます。門左衛門は、そうした歌舞伎の制作に情熱を注いだ時代を経て、藤十郎が引退してからは、義太夫が率いる竹本座の専属となつて、今度は浄瑠璃の創作に専念。元禄16（1703）年には、心中する男女の心理描写を豊かに表現した『曾根崎心中』が大当たりし、以降、次々と傑作を生み出しました。

門左衛門の浄瑠璃は、合戦などの時代物と、恋や人間関係などの葛藤を描いた世話物に分けられます。時代物としては『世継會我』『出世景清』『国性爺合戦』、世話物では『曾根崎心中』『中天網島』『冥土の飛脚』など、亡くなるまでに100以上の作品を書いています。

享保9（1724）年、11月22日、門左衛門は72歳の天寿を全うしますが、その少し前に、次のような辞世文（自分の生涯を締めくくるためにつくる句や文章）を残しています。

武門の家に生まれながら、武門を離れて公卿らの近くに仕えたが、自分には何の位もなく、庶民の中で暮らしても商売をし

らず、隠者のようでも隠者でなく、賢者のようでも賢者でなく、物知りのようでも何も知らぬ、世のまやかし者である。

唐や大和の教えになる道理や、芸能・雑芸・笑い話の類まで、何でも知らぬことがない風をして、口にまかせて筆にまかせて、一生をさえずり散らし、今はの際に言っておきたいと思う一番大切なことは、一字半言もなく、恥ずかしいと思うことが多く、七十余年の歳月を思えば、とりとめない一生を過ごしたものだ。もし辞世はと、問う人がいたら、

それぞ辞世

去ほどもに扱もそののちに残る桜が花しにほはば

（歌意）この世を去つても、後々まで自分の作品が残るならば、その作品こそが私の辞世。（去ほどもに扱もそののち）は、浄瑠璃の語り出しの決まり文句。「桜」は、印刷の版木に使う桜の木に例えて浄瑠璃の本を表している）

自分の浄瑠璃が残ればよいと思うのも愚かなことだ。灰に埋めておいた火が消えるまでほどの間に書いたものなのに。

《近松門左衛門 辞世文より現代文にて意訳》

辞世文には、自身のことを世のまやかし者とまで自虐的な言い方がされ、そして、最後の一節では、後々まで自分の作品が残れば、それこそ辞世とも述べています。皮肉で自虐的な表現の中に、世の中と自分を客観視した門左衛門の世界観が、この辞世文にうかがわれます。

check  
for

## 近松 門左衛門



河竹繁俊『近松門左衛門』吉川弘文館  
杉本苑子『埋み火』『杉本苑子全集』第6巻 中央公論社  
三田村鳶魚『近松の心中物・女の流行』中央公論新社  
近松洋男『口伝解禁 近松門左衛門の真実』中央公論新社  
『新編 日本古典文学全集 76・近松門左衛門集』小学館  
井上勝志『近松門左衛門』角川文芸出版  
小西聖一『近松門左衛門』理論社  
稲光伸二『近松門左衛門』（漫画）朝日新聞出版  
春樹椋尾『近松門左衛門』（漫画）草土文化  
『さばえ人物ものがたり上巻』鯖江市教育委員会文化課  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第3集 青少年育成福井県民会議  
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



近松門左衛門の名の由来には諸説ありますが、その一つに近江国大津（滋賀県大津市）にある近松寺に由来するものがあります。芸能に関係のある寺であったことから、姓を近松とし、名は、その寺には入ることのできない門前の小僧にすぎないと謙遜して門左衛門にしたのだとか。

# 高橋 梨一

たか はし り いち  
(蓑笠庵梨一)  
さりゅうあん り いち

1714年～1783年

丸岡（坂井市丸岡町）藩主の求めで私塾「蓑笠庵」を開き、俳諧の宗匠となる。  
松尾芭蕉の『奥の細道』を研究しその注釈書『奥細道菅菰抄』を完成。

どんな子だった？



## 古典や算術、俳句をつくるのが得意な少年

梨一は、松尾芭蕉の『奥の細道』の研究者として知られ、江戸時代から続く丸岡（坂井市丸岡町）俳壇の祖とされます。その生まれは、武蔵国児玉郡関村（埼玉県児玉郡美里町）。関久和の二男として誕生しました。小さい時から学問に励み、古典や算術、俳句をつくるのが得意であったといわれます。

梨一と丸岡との繋がりは、梨一が幕府の役人としてやってきたことに始まります。50歳の時に丸岡に定住し、その後、丸岡藩に仕えて、藩士に学問を教える私塾を石城戸（丸岡町石城戸）に開設。それ以降、丸岡では俳句が盛んになり、現代にもその伝統が受け継がれています。

episode  
1

## 松尾芭蕉の作風を受け継ぎ、生涯をかけて取り組んだ研究

元文4（1739）年、梨一は、江戸の旗本で俳人の佐々間柳居（りゅうきよ）入門し、本格的に俳諧を学びます。柳居は松尾芭蕉の作風を蘇らせた人物として知られ、柳居の影響を受けた梨一は、その後、幕府の役人となつてからも、仕事で地方を巡りながら芭蕉の杖跡を訪ね、芭蕉の句の研究に情熱を注ぎました。

宝暦11（1761）年、下兵庫村（坂井市坂井町下兵庫）の代官に着任したのを最後に、梨一は50歳で役人を退職。余生を丸岡で過ごすうちに、丸岡藩に召し抱えられることとなります。55歳の時、藩主の求めで石城戸に蓑笠庵という塾を開設し、儒学や俳諧、習字を教え、多くの門弟を育てます。また、梨一を中心として丸岡に俳諧の文化が根付き、句会などが開かれるよ

うになりました。

そうした中で梨一は芭蕉の『奥の細道』研究に没頭し、ついに奥の細道の注釈書『奥細道菅菰抄』を完成。それは、100冊以上の和漢の書物を調べて10年の歳月をかけ、わかりやすい注釈として著したものでした。梨一の伝記『蓑笠庵梨一』は次のように述べています。

さて、梨一が地方役人を歴任している間に宿願の大業が推進されていった。かねて芭蕉を崇拜していた梨一は、芭蕉の遺跡と聞くと余暇を見付けては必ず出かけ、古老の話を聞いたり、付近を踏査することにした。梨一が目標にしたのは『奥の細道』



（県内）坂井市  
（県外）埼玉県

## 神格化されるほど尊敬を集めた梨一

丸岡での梨一について記したものに『大日本永代節用無盡藏』(嘉永二年版)があります。同書について、京都大学人文科学研究所の横山俊夫氏が、その研究内容を前出の牧田正太郎氏に送った手紙から抜粋して紹介します。

下兵庫代官時代に年貢を減らすなど民のために尽くした政治を行った梨一は、民から慕われ、神格化されていた。死後は梨一大明神といわれ、町内に祠が作られる。『大日本永代節用無盡藏』では、梨一のように良い行いをしたものは神として扱われることを覚えておいてほしいと記されている。

また、江戸後期の出版物『続近世畸人伝』(全国の様々な階層の一芸一行に優れた人物の伝記)にも、梨一が登場しています。それを見ると、丸岡藩主は梨一を召し抱えるために、住まいと給金を提供するが出仕しなくてもよいという好条件で丸岡に来させ、そして、5年後、ようやく藩に出仕したとあります。そ

解の正鵠を期した。

《伊東尚一著『蓑笠庵梨一』より》

『奥細道菅菰抄』は、注釈書としては最も古く、奥の細道を理解する上での辞典として、後に続く注釈書のバイブル的な存在となります。また、同書には、芭蕉に対する梨一の尊敬の念が非常によく表れ、凡例の一節にもこの書の注釈は故事や古言のみとして、文意や句義を詳しく述べないのは、未熟な自分では風雅に大きな違いが出ることを恐れたためと記されています。

ただ能力が高くかわれていたのです。また、とても貧しい暮らしのため、出仕するのに必要な刀すら持っていなかった梨一に、使者が刀を渡しており、ぜひ召し抱えたいという強い思いが見えてきます。

そうした貧しい暮らしを詠んだ句に、「秋立てぬ起て何着ん老の肌」というのがあります。梨一は自身の素晴らしい句も多く残し、『もとの清水』や『大和紀行』などの句集もまとめ上げています。

天明3(1783)年、梨一は病に倒れ、70歳で逝去。亡骸は弟子たちによって台雲寺(坂井市丸岡町石城戸町)の墓地に葬られ、梨一を讃える碑文を刻んだ墓が建てられました。

※芭蕉の杖跡：芭蕉が訪れた場所。

※博引旁証：実例や証拠を広い範囲から多く挙げて説明すること。

※正鵠：ものごとの要点を正しく押さえていること。

※出仕：勤めに出ること。

### check for 高橋 梨一



高橋梨一『奥細道菅菰抄』勉誠社

高橋梨一『大和紀行』(石川銀栄子校注)福井現代俳句会

松尾芭蕉『芭蕉 おくのほそ道』(萩原恭男校・注)岩波書店

松尾芭蕉『芭蕉全句集 現代語訳付き』(雲英末雄・佐藤勝明訳)

角川学芸出版

齋藤孝編『奥の細道(声にだすことばえほん)』ほるぷ出版

伊東尚一『蓑笠庵梨一』牧田正太郎

伊東祐忠『蓑笠庵梨一小伝』梨一顕彰会



今日でも丸岡俳句会は毎年4月の梨一が亡くなった日に、台雲寺で句会を開いています。また、坂井市丸岡町では平成6年度から「俳句のあるまちづくり事業」として、公益財団法人丸岡文化財団が、町内の小学4年生から中学2年生を対象に俳句を募集し、優れた作品を表彰する「梨一賞」を設けています。

# 豊田屋 哥川

1716年～1776年?

三国の遊女で女流俳人。  
俳諧や書をはじめ諸芸に優れ  
高い教養を持ち  
独自の感性の句を残す。

どんな子だった?



## 7歳の時、北前船で賑わう三国湊へ

かつて交易で賑わった三国湊（坂井市三国町）の出村には、豪商や船主、文人墨客が足を運ぶ料亭が建ち並んでいました。そうした客をもてなす三国遊女は、教養と芸に秀で、品格が高く、その中でも、哥川はとりわけ評判が高く、才能にあふれた女性でした。その生い立ち、大和国初瀬川（奈良県桜井市

泊瀬川周辺）の生まれとされ、7歳の時に荒町屋という遊郭の養女に入りました。そして、16歳で遊女となり、18歳の時に泊瀬川と名乗っています。俳諧や書、茶、琴、香などの諸芸に秀で、とくに俳諧は哥川の俳号で世に知られるようになりました。

episode  
1

## 俳諧の才能を開花させた若き遊女

芸事や教養を身につけて美しく成長した泊瀬川（哥川）は、永正寺（坂井市三国町神明）住職の永言（俳号・巴浪）から俳諧と書を学び、その才能を見いだされました。『越前三国湊の俳人遊女哥川』では、日和山での句会に誘った住職が、哥川からの断りの手紙を読んだ際、彼女の感性に魅了される一節として表現されています。

日和山で行われる句会に出席するよう、手紙をつけても、いつも遠慮する旨の返事がもどって、巴浪を寂しがるが、今もまた、句会に出られない旨が書かれてあった。（中略）  
ところが、末尾に添えられてあった句に目を通していく巴浪

は、その句に次第に吸い寄せられていった。

日ざましに琴しらべけり春の雨

うらやましつもらぬ雪の梅もさき

美しいかみもゆはずに柳かな

夕顔やわれも人まつ花のとモ

《中島道子著『越前三国湊の俳人遊女哥川』より》

また、同書では、丸岡の俳人で松尾芭蕉の『奥の細道』研究者の高橋梨一との出会いから、自身の俳諧とより深く向き合い始めた哥川の変化についても触れています。



（県内）坂井市

## 多くの人に認められた多彩な才能

— 思えばあの人は、少しずつ変客<sup>かわかく</sup>てきていた。丸岡の梨一殿と屢々会うようになってから、あの人の中には変化がおこっていたようだ。

これまでは、滝谷連の束ね<sup>たばね</sup>を専一<sup>せんいつ</sup>にしてきた人が、無口となり、己の俳諧に立ち向かうようになっていた。

あの人にとっての行脚は、必然であつた。それを、連の雑役に振り廻していた自分が迂闊<sup>うくわん</sup>であつた。それにしてもあの人は、

26歳の頃、哥川は江戸に旅し、文人、俳人、絵師と交流しています。それは異例のことでした。遊女は年期という契約の年数が終わるまで自由が許されず、様々な厳しい掟<sup>おきて</sup>に縛られますが、哥川は年期が明ける前に旅を許されたのでした。これについて久保悌二郎氏の著書『遊女・豊田屋歌川』は、次のように述べています。

百日間の暇をもらい江戸行きを許可を申し出る。彼女は日頃からの行ないも心ばえもよく、よく尽くしてくれただのと許され、さらに一人旅も大変だろうから誰かに送らせようという申し出に、心構えはできている、身ひとつ菅の笠と竹の杖だけあればいいという。一同感じいり、人々に送られて三国湊を旅立つ。(中略)

江戸で温かく迎えられ、俳諧の士などを訪ね、日々茶を点じ、琴を弾き、香、花などを嗜んだという。(中略)

故郷に帰った後、(中略)三年経ったら身を退いて、庵<sup>いかり</sup>を結んで生涯俳諧三昧の生活を送りたいと申し出る。そしてこのことを聞き及んだ多くの人たち、大いに賞賛し彼女の元を訪ねた

命を縮めてまで……：覚悟してのことのようだ—  
そう気付いた左潮<sup>さうしほ</sup>は、ぎんのずしりとした襦袢<sup>じゆばん</sup>を手にしなが  
ら、肅然とした気持ちに襲われた。

と、そのとき、襦袢の中で、かざりと音がした。何かと探つてみると、一枚の短冊であつた。

奥ぞこのしれぬさむさや海の音 哥川

《中島道子著『越前三国湊の俳人遊女哥川』より》

と書かれている。

《久保悌二郎著『遊女・豊田屋歌川』より》

また、28歳の時には金沢に行き、加賀千代女<sup>かがのちよじよ</sup>らと句会を開いて親交を結ぶなど、俳人としての活動を活発に行いました。

31歳になると遊女を引退し、三国に豊田屋という遊女屋の主となつて、店を切り盛りしながら俳諧を続けます。その後、38歳で店を譲つて仏門に入り、三国の瀧谷寺<sup>たきやんじ</sup>境内に庵<sup>いかり</sup>を結びました。

尼僧<sup>にそう</sup>となつてからも各地の俳人と交流し、59歳の時には、与謝蕪村<sup>よせうそん</sup>が「玉藻集<sup>たまもじゆ</sup>」を出す際に、千代女の執筆に協力して序文を載せています。

※文人墨客<sup>ぶんじんぼくかく</sup>：詩文や書画などの風流に親しむ人のこと。

※遊郭<sup>ゆうかく</sup>：遊女のいる宿を一カ所に集めて屏で囲った場所。

※左潮<sup>さうしほ</sup>：永正寺住職の息子、杉原左潮。

### check for 豊田屋 哥川



『越前三国哥川俳句集』三国町文化協議会  
『哥川遺墨集』三国町文化協議会  
哥川『哥川句集』加藤修次郎  
中島道子『越前三国湊の俳人 遊女哥川』渓声出版  
久保悌二郎『遊女・豊田屋歌川』無明舎出版  
杉原美代子『哥川の寺 永正寺俳諧抄』永正寺  
本多柳芳『越前三国哥川の生涯』本多柳芳  
足立尚計『ふくい女性風土記』日刊県民福井  
『ふくい女性の歴史』福井県



三国湊の遊女は江戸の吉原と並ぶほど格式が高く、井原西鶴は北国にまれな色里と誉め、近松門左衛門はここを舞台にした歌舞伎狂言『傾城仏の原』を書いています。また、哥川が俳諧や書を学んだ永正寺や、遊郭のあった出村をはじめ、三国の至る所に往時をしのばせる場所が今も残っています。

う え      じ ま      じ ゅ う      べ      え  
**上島重兵衛**

1760年～

荒れ地の多い月ヶ瀬村（池田町）に  
**水田を開墾**するために水路を建設。  
**難工事や村同士の対立**などに苦勞しながら  
私財と生涯を投じて**上島用水を完成**。

どんな子だった？



**子どもの頃に祖父から教えられ、植林を実践**

重兵衛は、足羽川の上流にある月ヶ瀬村（池田町）に生まれました。家は農業と酒造業を代々営んできた資産家でした。子どもの頃、母の実家（越前市二階堂）を訪ねるたびに、重兵衛は祖父から植林の話聞き、また、実際に植林を見ていたことから、成長すると月ヶ瀬の山野を自ら開拓して、杉の苗

5万本を植林するという大事業を行います。上島家の長期的な展望を考え、また、村を豊かにしたいという強い意志を抱く青年の大事業に、当時、村の人々はこぞって驚嘆したといえます。そんな重兵衛が次に手がけたのが、後に上島用水と呼ばれ、月ヶ瀬村の荒れ地を実り多い水田に変えた用水建設でした。

episode  
1

**村を豊かにするため、用水建設に命をかける強い決意**

池田町における用水の建設について、池田町史は次のように記しています。

稲作には灌漑用水は大切なもので、用水確保の為には村中が団結して働いた。山がかりの土地は谷水で、灌漑水は十分と言われながらも、池田の川は侵蝕が甚だしく、河谷が深く刻まれて、余程上流からでない限り、堰水を引水することが出来なかつた。（中略）

上嶋用水は志津原村鯉谷口より取水、更に大寺谷で受水、志津原地内の水田に分水して、月ヶ瀬村までの二里弱の用水を言うのである。

『池田町史』より

重兵衛が生まれ育った月ヶ瀬村も、水量の豊富な川が村内を流れているものの水を得られず、水田の開墾は月ヶ瀬村の長年にわたる悲願となっていました。

当時月ヶ瀬村の田地は水利が悪く、畑地や荒地が多く、早くから用水の計画が出ては消え、消えては出たが、重兵衛はこの開墾を決意した。村を貫流する河内川は遙かに谷深くして、揚水の方法など考えられず、引水するには、地勢の高低、流路等の点から考察して、志津原村の上流から水源を求めねばならなかった。用水路が出来れば月ヶ瀬村三十町歩の田地が裨益することとは明らかであり、数年にわたって実地に調査測量し計画を



（県内）池田町

練った、開鑿するとなれば莫大な経費と日時を投入しなければならず、水路の過半が他の村内を通るがゆえに、池田郷内とはいえ、なかなか大変な計画であった。 《池田町史》より

重兵衛は家族や上島家で働く者を集めて、用水を建設する決意を伝えます。そして、数回にわたる家族会議が開かれました。忠実な下僕げやくの久七という者は、莫大な費用がかかるため財産をつぎ込むことになり、上島家が傾いてしまうから、中止してほしいと反対しました。すると重兵衛は、

「この計画は上島家の私事ではない。月ヶ瀬村のためにするものである。命をかけて村全体のために尽くそうという計画なのだ。お前も協力してもらいたい」と理解を求めました。

## episode 2

# 計画から40年近くの歳月を費やした上島用水

用水の総延長は8キロメートル近くにも及び、その半分ほど工事が進みますが、そこには天狗壁てんぐかべと呼ばれる巨大な岩盤が待ち受けていました。断崖絶壁の天狗壁は、足場が悪い上に、現代のような機械もなく、タガネという道具を使って人力で根気よく岩を割るしか方法がありません。工事はなかなか進みませんでした。そればかりか怪我をする者が続出し、人夫たちは、天狗のしわざだと言って恐れ、工事を嫌がり始めました。

重兵衛はこの難局を乗り切ろうと、伊勢神宮と金刀比羅神社に祈願しました。すると不思議なことに工事がすんなりと進むようになり、最大の難関を越えることができました。しかし、問題はそれだけではありませんでした。資金が底を尽き、池田を管轄する鯖江藩から借金をしたり、取水口のある志津原村との間で紛争が起きたりしたこともありました。

しかし、久七はそれでも反対しました。ところが傍らにいた重兵衛の妻は、重兵衛に、

「命をかければ何ごともできないことなどありません。もし不幸にして失敗するようになったならば、私はあなたとともに喜んで死にます。迷わず用水づくりに着手してください」と、夫を支える覚悟を語ったと伝えられています。

こうして家族の話し合いで工事の実行が決定すると、重兵衛は志津原村と用水敷地の賃借や、交換買取などの協定を行いました。

寛政5（1793）年、建設計画が立案され、享和2（1802）年3月、いよいよ工事に着工。重兵衛が43歳の時のことでした。

天保3（1832）年、計画から40年近くの歳月を費やして重兵衛が私財を投入した用水が完成。この用水によって稲作ができるようになっただけでなく、飲料水や防火用の水も確保できるようになったのでした。そして、今も重兵衛が命をかけて建設した上島用水は、地域の主要な農業用水として、パイプライン化されて利用されています。

※灌漑：農作物の生育に必要な水を用い水などで供給し、耕作地を潤すこと。

※里：一里は約3.97キロメートル。

※裨益：助けとなり、役立つこと。

## check for 上島 重兵衛

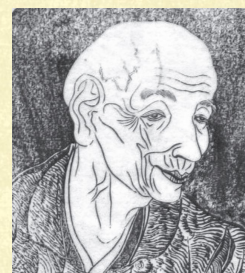


『池田町史』池田町  
『郷土をつくった偉人事典』（上田孝俊監修）PHP 研究所  
『越前若狭のふれあい no.39』関西電力原子力事業本部



かつては田に引く水がもとで村同士の対立が何度も起こっていました。福井平野を流れる十郷用水の流域や、越前市の日野川流域にも水争いの歴史があります。そうした争いをなくすため、用水建設に命をかけた人の話は、日野川の松ヶ鼻用水や越前市横市・庄・塚町を流れる土呂川などにも残っています。

すぎ た げん ぱく  
杉田 玄白



1733年～1817年

『ターヘル・アナトミア』をもとに  
日本初の解剖学書『解体新書』を著し、  
医学を発展させた小浜藩の藩医。  
その刊行は翻訳が盛んになるきっかけに。

どんな子だった？



自分のことを「もともと大ざっぱ」な性格だったという玄白。しかし、それは…

杉田家は代々医者の家柄で、父は江戸の小浜藩邸で藩医を務めていました。母は玄白の出産時に亡くなり、人々はそれに気を取られ、赤ん坊は死んだものと思ひ込んでいましたが、突然、元氣な泣き声を上げ周囲を喜ばせたといいます。その後、父が小浜詰を命じられて小浜へ移り約5年間を過ごし、再び父と江戸に出た

玄白は、外科の医師を学んで医者になります。玄白は自分のことを「もともと大ざっぱな人間」と言っています。しかし、それは細かいことにとらわれず、全体を見通して最善の方法を見つける才能ともいえるもので、『解体新書』の完成を根底で支えるものとなっていました。

episode  
1

オランダ語の『ターヘル・アナトミア』を日本語にしたい！

玄白が生きた当時、西洋からきた書物の翻訳は大変な困難を伴いました。鎖国をしていた日本でオランダ語を話せる人物は少なく、医学の専門的な言葉を理解できる者は一人もいませんでした。例えるなら暗号の解読のようなものだったのです。では、どのように『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、『解体新書』を作ったのでしょうか。玄白が晩年に著した『蘭学事始』に、その入手や翻訳の苦勞、医学に取り組む姿勢、完成の喜びが綴られています。

明和8（1771）年の春と記憶している。

中川淳庵がオランダ人の宿へ行くと、オランダ人が『ターヘル・アナトミア』

と『カスバリウス・アナトミア』の2冊をとり出して、希望者がいれば譲ろうと言うので、それを持ち帰ってきた。私は一字も読めなかったが、実際に解剖して描いたものど知り、とにかく欲しいと思った。（中略）  
我が家は貧しく、買う力がないため、小浜藩の役人のもとへ持って行き、これを入手したいと話す、役に立つものなら藩にとり計うと言った。  
〔蘭学事始〕上之巻より現代文にて意訳  
玄白を知る役人の手助けもあつて願ひは叶い、小浜藩が費用を負担して『ターヘル・アナトミア』を入手。玄白は、そこに描かれた人体の構造が、これまで学んだものと異なることを知



（県内）小浜市  
（県外）東京都荒川区（元小塚原刑場）・  
新宿区矢来公園

## 大胆な発想と勇気で『解体新書』を発行

り、真実を知りたいと熱望します。そして、前野良沢、中川淳庵らと小塚原の刑場で死刑となった遺体の解剖に立ち会います。三人は、実際の臓器と『ターヘル・アナトミア』とを見比

後の『蘭学事始』の中で玄白は、『解体新書』の完成は蘭学を学んだ経験のある良沢の功績が大きいと述べています。一方、玄白は一日じゅう考えても一行すら理解できない日もあったといっています。

初めてのことなので、とにかくわかりやすさを目指そうと決め、時に翻訳、対訳、直訳、義(意)訳と、さまざまに工夫した。あれこれ換えたり改めたりして昼夜を問わず自分で書き直し、草稿は11回も書き換え、四年をかけてようやく成し遂げた。

《『蘭学事始』より現代文にて意訳》

しかし、『解体新書』の完成後もまだ問題が残っていました。当時、外国に関する著書は発刊禁止になることがあったのです。玄白は悩んだ末、大胆な作戦に出ます。知人を介して將軍に献上し、公家や幕府の老中にも礼儀を尽くして進呈したのです。大勝負は功を奏しました。『解体新書』は注目を集め、日本の医学に大きく貢献するものとなりました。まさに翻訳から出版まで、玄白の大胆な発想と勇気が成し得た偉業でした。

玄白が後に記した『蘭学事始』には、こうした翻訳の経緯や、当時の最先端科学であった蘭学の草創期を彩った人々との交友も記されています。

実はその『蘭学事始』には、福沢諭吉にまつわるこんな秘話

べながら、図の正確さに感銘を受け、これを翻訳して多くの医者に読んでもらいたいと考え、さっそく翌日から翻訳に取りかかる約束をします。

も…。諭吉は玄白が亡くなった後に生まれ、2人が会ったことはありませんが、諭吉の行動がなければ、私たちはこれを読むことができなかったかもしれません。『蘭学事始』は幕末になると原本や写本が散逸し、残っていないとされていたのです。ところが偶然にも諭吉の知人が露店で写本を発見。感激した諭吉は有志たちとそれを再版し、多くの人が読めるようにしました。その本の序には、玄白たちの苦心を思い涙したという諭吉の言葉が記されています。

また、玄白は診療を行う医者としても立派な人でした。家の前に門前市が立ったかのように大勢の患者が訪れていたといいます。晩年に著した『形影夜話』には、病人に向き合う医者として玄白が大切にされた理念が綴られ、前述のように患者から慕われ信頼された医者であったことにもうなずけます。

自分の妻子が病気になるのと同じに思い、深い思慮のもと親切に治療しなければならぬ。貧しい者にも身分が高く裕福な者にも、療治は同じようにすることを心掛けなければならぬ。

《杉田玄白著『形影夜話』より現代文にて意訳》

※蘭学：オランダが鎖国中の日本にもたらした西洋の学問。「蘭」の字は、オランダを和蘭陀と漢字表記したことによる。

### check for 杉田玄白



杉田玄白『蘭学事始』(片桐一男全訳注) 講談社  
酒井シヅ『すらすら読める蘭学事始』 講談社  
杉田玄白『解体新書』(酒井シヅ全訳注) 講談社  
大石学ほか『杉田玄白「解体新書」と新しい医学』ミネルヴァ書房  
小西聖一『杉田玄白 蘭学のとびらを開いた一冊の書物』理論社  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第4集 青少年育成福井県民会議  
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』  
福井県立こども歴史文化館



『蘭学事始』の中で平賀源内について述べるくだりには、こんな話も登場しています。ある日、大蛇の頭の中にある石で作ったという物をオランダ商人から見せられた源内は、それを大蛇ではなく竜の骨であると指摘。オランダ商人が竜という生き物はいないと反論すると、源内は小豆島で産出した「大なる竜齒に続きたる竜骨」を見せて「竜骨なり」と言い、つまり現代でいう恐竜の化石が竜骨であると説明しています。

# 中川 淳庵 （な）



1739年～1786年

杉田玄白、前野良沢とともに  
『解体新書』を著した小浜藩の蘭方医。  
蘭学者、本草学者でもあり  
平賀源内の発明にも貢献。



## 小浜藩の藩医の家系に生まれ、跡継ぎとして医学を学ぶ

淳庵が生まれた江戸中期は、八代將軍吉宗が漢訳蘭書の輸入禁止を緩和し、蘭学が盛んになりだした時代でした。淳庵は、小浜藩の藩医をしている父が、藩主の参勤交代に同行して江戸に住んでいたため、江戸の麹町で生まれました。

後に淳庵とともに『解体新書』をつくる杉田玄白とは、同じ

小浜藩の藩医の子同士ですが、淳庵が生まれた翌年、玄白の父が小浜勤めとなり玄白の一家は帰郷。6歳年上の玄白に淳庵が出会ったのは、それから12年後のことでした。延享2（1745）年、玄白が江戸に住むようになり、2人は、ともに藩医の跡継ぎという境遇もあって、次第に親交を温めていきます。

episode  
1

## 本草学の研究を通じて平賀源内と出会う

淳庵は、当時の治療手段の主流であった本草学（動植物・鉱物）の研究に取り組み、19歳の時、本草学者の田村藍水の門弟（もんてい）になります。そこで出会ったのが、同じく門下生の平賀源内でした。源内は本草学だけでなく、科学者、作家、陶芸家といった顔を持ち、多彩な才能を発揮した人物です。その発明の一つ火流布は、淳庵と一緒につくったものでした。火流布とは石綿を原料にした燃えない布のことで、淳庵はオランダの書物に載っていたアスベストが石綿であることを突き止め、友人の平賀源内と石綿を採掘して火流布をつくりました。

また、源内は薬草の物産会を主催し、淳庵も3種類の薬草を出品しました。以降、物産会は毎年開催され、源内が発行した

その記録には、校閲者として淳庵も名を連ねています。

明和2（1765）年、オランダ商館長らの一行が江戸を訪れた際、淳庵は、彼らが滞在する長崎屋を度々訪ねるようになります。長崎屋は意欲ある医師たちにとって、ヨーロッパの学問への窓口のような存在でした。そして、その訪問が淳庵や杉田玄白、前野良沢による『解体新書』刊行のきっかけとなったのでした。

一七七一年（明和八年）、その時がきた。この年のオランダカピタンの参府は二月二日から三月一〇日までで、江戸日本橋本町長崎屋源右衛門方に滞在していた。三月一日に一〇代将



（県内）小浜市  
（県外）東京都

軍家治に謁見した。謁見の前には一般人に会わないのが原則であったが、一応幕府の身分の高い將軍の侍医などの名で既になじみになってる人たちは長崎屋に向いていた。このグループの一人である淳庵は、一年に一度通詞に会って、学問上の疑問点をだしては意見を聴き、指導をうけていた。このとき、一行のなかで『ターヘル・アナトミア』と『カスバリユス・アナトミア』というオランダの解剖書を出してきて、希望者があれば譲ってもよいという人がいた。先年、ヘーステルのシユルゼインという外科の本を、寝ずに写した玄白のことを思った淳庵は、早速これを玄白の所に持って来た。

《青少年育成福井県会議編『若越山脈』第5集より》

## 日本を代表する学者として、

安永5（1776）年、淳庵は桂川甫三の息子とともに、江戸に来ていたオランダ東インド会社の外科医ツンベルクを訪ねます。そして、1ヶ月近く通い詰め、医学の他に植物標本作成法についても教えを受けています。ツンベルクの著書『日本植物誌』や『日本紀行』には、淳庵の研究などが紹介され、淳庵の名は欧米に知られるようになりました。

一番若い医者は、桂川甫周という人で、將軍の侍医なので衣服に將軍の紋をつけていた。この若者は愛想がよく陽気な性質の人で、よく私の許にその友達の中川淳庵をつれて来た。この人は彼より少し年長で、この国の公子付の医者である。二人とも、ことに後者は和蘭語をかなり話した。二人とも和蘭語或は支那語の書物により、博物学・鉱物学・動物学および植物学を多少研究していた。（中略）二人は学問を熱愛する上に世の人の

これが淳庵と玄白の『ターヘル・アナトミア』との出会いでした。玄白は精密な解剖図に驚き、藩に頼んでこれを購入。淳庵、玄白、良沢らは、刑場での解剖に立ち会い、その図版の正確さに驚愕します。そして、3人は『ターヘル・アナトミア』の翻訳に着手。しかし、専門的な語句が多く、推理力や想像力を駆使して悪戦苦闘の末、ようやく安永3（1774）年、『解体新書』が完成。玄白の友人であり將軍家の侍医桂川甫三を通じて、將軍に献上しました。

## 海外に紹介された淳庵

為にならうとする熱望があり、又、一寸外で見られない従順な性質を持っている。私は二人が外の人には欠けている重要な智識を持っていることを知ったので、愈々親切にこの二人のよい心掛を助けてやった。

《ツンベルク著『日本紀行』より》

また、オランダ商館長のティチングは、ロンドンで出版した『日本風俗図誌』の中で、淳庵らの勉学がみるみる上達したことに、驚いたと讃えています。

天明5（1785）年、淳庵は、国元へ戻る藩主に従い小浜勤めとなります。翌年、病気を発症し、治療のため江戸へ戻りますが、病は重く、ついに6月7日、この世を去りました。

※オランダカピタン：オランダ商館長。

※参府：江戸幕府を訪ねること。

※通詞：通訳。

check for

### 中川 淳庵



和田信二郎『中川淳庵先生』大空社  
『中川淳庵』小浜市立図書館  
『中川淳庵先生事蹟』中川淳庵先生百五十年記念会  
二宮陸雄『新編・医学史探訪』歯葉出版  
酒井シヅ『すらすら読める蘭学事始』講談社  
長尾剛『話し言葉で読める「蘭学事始」』PHP 研究所  
『小浜市史紀要』第4輯 小浜市教育委員会  
みなもと太郎『風雲児たち』（漫画）リイド社  
『福井県史』通史編4 近世二 福井県



天明2（1782）年、遭難した船頭たちがロシア領に漂着し、10年後に帰国するということがありました。帰国後、尋問を受ける中で「ロシアは日本のことに詳しく、中川淳庵、桂川甫周という人物の名も知られている。日本のことを書いた本の中にもある」と答えています。淳庵と甫周の名はツンベルクによって、広く知られるところとなっていたのです。

# 夢楽洞万司

1735年～?

代々続いた町絵師。初代は雑俳の宗匠。  
絵馬、後に天神掛け軸でも人気を博し  
北陸一帯の神社や堂に  
広く夢楽洞の絵馬が分布。

どんな子だった?



## 代々その名を受け継いだ、福井城下の町絵師

夢楽洞万司は、その名を受け継いだ歴代の町絵師で、江戸時代後期から大正時代にかけて約150年間、絵馬や天神の掛け軸などを製作していました。工房は福井城下の小田原町（福井市田原町）にあり、北陸道沿いの店先に並ぶそれらの絵は、福井城下を行き交う旅人の土産品としても人気がありました。

初代の万司は本名を万屋（大岡）曾平といい、「万司仙人」の号を名乗っていました。子どもの頃のこととはまったくわかっていませんが、当初は雑俳の宗匠をしており、若い頃から言葉の感性に長け、絵が上手な少年であったと思われる。

episode  
1

## 初代は多彩な才能を持つクリエイター

夢楽洞万司について、『図説福井県史』は次のように紹介しています。

夢楽洞工房の初代絵師は、「万司仙人」の号を名乗り、はじめは雑俳の宗匠（選者・点者）として頭角を現しました。江戸で「川柳」が人気を集め、選者が前句を出題して付句を応募する万司合の興行が流行した宝暦から天明期（一七五一〜八八年）のことです。越前各地で同様な大衆俳諧、雑俳の句合を興行していません。（中略）万司が催した句合には、地元越前を中心に北は能登、東は美濃、南は近江・京都・大坂からも投句されています。投句者には、「組」「連」などの同好者仲間を表す名が多くみられ、

各地に取次グループのあったことがうかがえます。当初は、この取次網を利用して宗匠万司自筆の絵馬が宣伝されたのではな  
いかと考えられます。  
《『図説福井県史』近世32より》

また、江戸時代に庄屋を務めていた土屋家（あわら市）の古文書に、万司の人物像に関する記述があり、その内容を『夢楽洞万司の世界』はこう解説しています。

そこでは、まず「万司あたま二毛あるといへ共、心八仏道をさとり、第一二して皆人まんし和尚と俗二いふ」とあり、万司が仏道に通じて「まんし和尚」と呼ばれていたことが知られる。



（県内）福井市

## 人気を博し、北陸一帯に広がった万司の絵馬

そして、苔古庵のなかは、「四季の花、儒仏神をかざり、日本の名所を寄あつめ、天井にはさくら、なげしには金銀の風車、俗此世の極楽ならんか」というようすで、「貧家にすみて貧を左のしみ、月雪花をあいすゆへ、当国はいふにおよばず、門弟多し」というのである。万司は、儒教・佛教・神道いずれにも通じ、

夢楽洞万司の実態が明らかになったのは平成3（1991）年から福井県立歴史博物館（当時は福井県立博物館）が、県内に残る約4千枚の絵馬を調査したのが始まりでした。そして、奉納された年代や画風による分類、奉納者の判別、絵具の検証などが行われ、そこから様々なことがわかってきました。

初代万司の絵馬は、安永期（一七七二〜八〇年）に増え始めます。絵柄には、伝統的な馬図のほかには歌舞伎や浄瑠璃で演じられたさまざまな物語図がありました。その後、夢楽洞絵馬は旅の土産品として流行し、人びとの移動とともに普及します。さまざまな事情で村を離れた人びとが、帰郷のたびに個人・仲間て自村の堂社を飾っていたのです。北陸は真宗信仰のさかんな地です。旅ブームの到来は、京都の本願寺詣りの人気を高めたでしょう。夢楽洞絵馬が真宗信仰の習俗に支えられ、より広く受容されたことも考えられます。

夢楽洞は、越前でさかんな正月行事、天神講にまつる天神掛軸の製作も手がけていました。俗に「まんし天神」とよばれ、上半身を大きく描くところに特徴がありました。現在、この天神画は嶺北地方の鯖江以北に広がっています。教育の需要が高まり、各地に寺子屋が普及した幕末期に創始されたと思われ、画

栄華と貧とをともに楽しみ、旅と自然を愛する、多芸多才な人物で、彼を師と仰ぐ門弟が他国にまでいるというのであった。「万司」こそ、大胆にも「万の司」であることを広言する号であったのだろうか。

《福井県立博物館編『夢楽洞万司の世界』より》

の筆致からも二代万司晩年の作と推定できます。学問・書の神とされる天神（菅原道真）をまつる習俗が武士から町人、農民へと広がるなか、夢楽洞の新品、奇抜な大首絵の「まんし天神」が好評を博したのでしょう。

《図説福井県史》近世32より》

夢楽洞万司の工房は、世代交代をしながら大正期まで続き、明治の初め頃には、絵草紙やその他出版物の販売も手がけていました。

また、明治16年の新聞には、大勢の人々が店先に集まり、店頭に掲けられた合戦図などの絵馬を見物して楽しんでいるという記事があります。娯楽の少ない時代に、色とりどりに描かれた絵は、道ゆく人々の足を止めさせるほど、面白く魅力的なものであったのです。そして、旅の土産として購入した絵馬は、ふるさとの神社に奉納され、村の人々は旅の思い出話とともに、絵馬を鑑賞して楽しんだのではないかと考えられています。

※雑俳：俳諧から派生し、庶民に流行した娯楽文芸。

### check for 夢楽洞 万司



- 『夢楽洞万司の世界』福井県立博物館
- 『絵馬「EMA GALLERY」』福井県立博物館
- 『モノから学ぶ』福井県立博物館
- 『ふくいミュージアム No.29』福井県立博物館編
- 『れきはくMOOK 1 絵馬』福井県立歴史博物館
- 『福井県史』通史編4 近世二 福井県
- 『図説福井県史』福井県
- 『福井市史』通史編第2巻 福井市
- 『絵馬の世界』敦賀市立博物館編
- 『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



三国町の称名寺には、初代万司の「名月や 薄は薄 萩は萩」「栄めよ 此朝兎の 花盛り」という辞世の句碑があります。“薄は薄、萩は萩にすぎない（自分たちも大した存在ではない）けれども、一日だけの花の朝顔が咲き乱れるように、束の間でも大いに楽しもう”という歌意からは、夢楽洞という雅号にも通じるものが感じられます。

# 伴信友



1773年～1846年

江戸後期の小浜藩士。国学者、歌人  
本居宣長没後の門人となり、  
『比古婆衣』ほか数多くを執筆。  
※国学における「天保の四大家」の一人。

どんな子だった?



## 順造館に学んだ知識欲の旺盛な少年

信友は小浜藩士の山岸惟智の四男として誕生。生家は現在の県立若狭高校の順造館を入れて右側の辺りにありました。八歳で藩校の順造館に入学した信友は、学校から帰ってからも、父に次々と質問をする知識欲の旺盛な子どもであったといえます。勉強熱心な信友は藩校でも評判になり、やがて養子の話が持ち上

がります。天明6（1786）年、江戸の藩邸に勤める小浜藩士の伴信当の養子となり、翌年、江戸に移りました。また、幼い頃は体が弱く病気がちでしたが、信友はそれを克服しようと武芸の練習に励んで体を鍛え、文武両道の青年に成長していきました。

episode  
1

## 本居宣長の本を読み、国学の世界へ

伴家の養子に入った信友は、江戸の小浜藩邸に勤めながら、牛込（東京都新宿区）にある小浜藩の藩校講正館に学びました。この頃、小浜の順造館と江戸の講正館の間では盛んに交流が行われ、信友は小浜藩の儒学者である山口管山や、小浜で学んだ西依墨山ら優れた師と交流し、向学心を燃やします。また、信友の兄が杉田玄白や中川淳庵の友人であったことから、信友は彼らを訪ねて、外国の学問を知ることができました。玄白は向学心の強い若い信友に、次のような内容の漢文を書いて渡しています。

一、昨日の失敗を、いつまでもよくよくして、今日に持ち越すな。

- 二、明日のことを、あれこれと、取り越し苦労するな。
  - 三、飲みすぎと食いすぎは慎め。
  - 四、食べ物本物を食べ、にせものは食べてはならない。
  - 五、少しぐらい体調が悪くても、むやみに薬を飲んではいけない。
  - 六、若いからといってなにごとでも過ぎてはいけない。
  - 七、常に体を使い、動き働く努力し、楽なことを考えてはいけない。
- 信友は学者たちと交流する中で、次第に国学に目覚めます。当時、日本の学問は儒学を主流とする一方で、『古事記』などの古典から日本古来の文化や精神を探る国学も行われ、中でも本居宣長がその学者として注目を浴びていました。

(県内) 小浜市  
(県外) 東京都新宿区 京都府京都市



## 古典やその中の言葉をとことん調べる信友の追求心

宣長の『古事記伝』や『詞の玉緒』を読んだ信友は、著者に教えを受けたいと思うようになります。そして、29歳の時、宣長に国学を学ぼうと決心。その弟子を介して入門を希望しますが、少し前に本居宣長は亡くなっており、宣長の弟子で養子となっていた本居大平に国学を学びます。

また、同じ年に『若狭旧事考』を書き始めています。この時、頭の中には宣長の『古事記伝』があったのでしよう。宣長は日本古来の文学や歴史を儒学の倫理感に基づくものではなく、あるがままに受け入れることを尊重した学者でした。信友はそう

した宣長の考え方に基づき、若狭に関する古い書物や若狭以外の日本史のあらゆる書物を研究し、さらに若狭に住む老人から言い伝えを詳しく聞いて、丁寧に調べ上げてゆきました。こうした方法による歴史研究は、当時としては珍しいものでした。『若狭旧事考』は、信友の豊かな古語の知識と言語学の力によって、若狭地方の地名の起源や、神社のいわれを科学的に解明するものとなり、信友はこれを出発点に、国学者としての第一歩を踏み出したのでした。

信友の代表作の一つに20巻からなる『比古婆衣』という随筆集があります。その中の「上手」と「下手」の由来についての研究を見ても、多くの文献を様々な観点で細かく調べ、照らし合わせて解明していることから、信友がどれだけ多くの書物を読み、研究を重ねたかがわかります。

浅い磯のことで、経験が浅くて未熟なことから、上手の反対文字の「下手」という字を用いて、へたとよませたのだろう。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈（第4集）』より》

藩主酒井忠進の京都所司代時代には、信友も京都に移り、その間も所司代での仕事をしながら、東寺百合文書の調査を行っています。また、6年後に江戸へ戻ってから、多忙な仕事の合間を縫って研究を続け、48歳で隠居した後には、国学に専念します。信友は生涯に100冊を超える本を著し、また、校訂した本や編集した本も500冊を超えます。前出の随筆集『比古婆衣』ほか、後の研究者にとって貴重な著書が多く、平田篤胤、香川景樹、橘守部とともに「天保の四大家」として歴史に名を留めています。

※国学：江戸時代中期から後期にかけて発達した古典研究の一派、その学問。

※京都所司代：京都の警備や朝廷・公家の監察、町奉行の管理、近畿全域の訴訟の裁決、西国大名の監察などにあたった職名。

※東寺百合文書：京都の東寺に伝来した平安時代以来の文書。国宝。2015年、ユネスコの世界記憶遺産に登録。

上手、下手、「後漢書」に上手工功などという言葉がある。もちろん漢語である。上手という語の「手」をずと読むのは、仏教語の千手観音の「千手」をせんずと読む、これは、「珠数」をじゆず、「員数」をいんずと読むのと同じである。

「源氏物語」に、「ものの上手」などと書かれている。しかし上手の反対語の「下手」と書いてへたと読むのは、古い書物にはみあたらない。たぶんのちの人の俗語ではないかと思われる。

谷川士清という人の著書「和訓栞」に、「下手」と書いてへたと読む。「へた」は海辺の浅いところを「へた」といい、沖の深いところに対してよぶと書いていいる。つまり「へた」とは水の

### 伴 信友



『人づくり風土記 18』農山漁村文化協会  
河野省三『伴信友』若狭史学会  
三上一夫『福井県の教育史』思文閣  
『伴信友 わが国近世考証学の泰斗』福井県立若狭歴史民俗資料館  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第4集 青少年育成福井県民会議  
大鹿久義『稿本伴信友著作集』温故学会  
『福井県史』通史編4 近世二 福井県



信友が使った本にはちょっと変わった蔵書印が押してあります。一つは「身後俟代我珍藏人」というもので、「私のあと私に代わり大切に保存してくれる人を待つ」という意味。また、“この書物を借りて読む人があったら、読んだ後は早く返してください”という蔵書印もあり、書物をとても大切にしたい信友の心が感じられます。

# 東條 義門 (条)

1786年～1843年

若狭国小浜妙玄寺住職で国語学者。  
動詞・形容詞などの用言の活用や  
品詞・助詞・音韻の研究など  
今に通じる国語学に大きな足跡を残す

どんな子だった?



## 学問が身近な環境にあった少年時代

義門は、若狭国(福井県)小浜藩主にゆかりの深い妙玄寺(小浜市広峰)住職の三男として生まれました。  
父や兄、叔父ともに優れた学僧と称された人物で、義門はいつも学問が身近にある環境で育っていききました。9歳の時、父の伝瑞が亡くなったため、叔父の元で暮らした後、14歳で他所

の寺へ養子に入り、17歳からは京都で宗門の教えを本格的に学び始めました。

頭脳明晰で学問を好み、夜更けまで読書に没頭するあまり、眠気をもよおすと、眼のふちに眠気覚ましになるものを塗ってまで読書をしたというエピソードも伝わっています。

episode  
1

## 現代に通じる六段階活用の文法研究

義門は22歳の時、実家の妙玄寺を継いでいた兄が亡くなったため、実家に戻り第七世住職を継ぎました。しかし、学問への志は衰えることなく、旺盛な研究心を満たしていくかのように、住職をしながら学問に取り組み生涯を送ることになります。

義門の業績は大きく2つに分けて、文法や音韻などの国語研究と、浄土真宗の研究が挙げられます。なかでも国語研究の成果には、現代の私たちが文法として必ず学ぶ、とても身近な内容が含まれます。

例えば、動詞には「未然」「連用」「終止」「連体」「已然(仮定)」「命令」という語尾の変化を分類する活用形がありますが、これを初めて六段階としてまとめたのが義門でした。

義門は国学者の本居春庭が著した活用の研究書である『詞八衢』を土台に、研究をさらに進めて、六段階の名称を「将然言(未然言)」「連用言」「裁断言」「連体言」「已然言」「希求言」と命名しました。これが現在、学校で教える文法の六段階の活用形に引継がれています。そしてさらに、義門はこの活用形を解説するために『活語指南』や『和語説略図』、『友鏡』を著しました。若狭の歴史民俗の研究者である永江秀雄氏は、義門と学問について、自著の中で次のように紹介しています。

義門師は十七歳の秋、初めて京都の高倉学寮に出て講義を受け、それ以降ここで学んでいる。この高倉学寮は、現在の大吉



(県内) 小浜市

## 教典の研究から日本語の音韻研究へ

大学の前身で、東本願寺派宗門教育の中心機関であった。また、義門はここで教えを受けた「靈曜」師を深く尊敬し、後には尾張の養念寺にも赴き、この恩師について宗学を修め宗門の教養を究めるための学びを続けたのである。

義門師は、その他にも師匠と仰ぐ幾人もの学者、学友とも申

義門が国語の研究を始めた目的は、浄土真宗の教典や親鸞上人の言葉を正確に読み解くことにありました。その中で「信心」という漢字に付いている振り仮名「シンジム」に注目したのが、日本語の発音（音韻）研究の発端でした。ともに「ン」と発音しますが、振り仮名では「ン」(n)と「ム」(m)に書き分けられていました。

中国伝来の漢字には末尾が「ン」の文字が多くありますが、それらは、日本語の振り仮名を付ける際に、古くから「ン」(n)と「ム」(m)に使い分けられていたのです。義門はその謎を探るために全国の地名表記や万葉仮名を精査し、また、古代中国の書籍にまで遡って検証しました。

この音韻研究は生涯にわたり、58歳で亡くなる前年に、40年間近くにわたる研究の集大成として『男信』全3巻を出版しました。著書名は、上野国(群馬県)利根郡にあった地名からとったものです。『男信』の「男」(ナン)も「信」(シン)も共に最後が「ン」の発音ですが、これも古くは「ム」(m)と、「ン」(n)に区別されていた漢字でした。このように男信という地名には、(m)のマ行の音や(n)のナ行の音の変化が顕著に見られることから、義門は研究書のタイトルに、日本の音韻の変化を象徴する地名を付けたのでした。

すべき多くの研究者から、特に国語(和語)に関する教えを受け、自説をも述べて批評を求めるなど、極めて広範にわたり深い探求を続けている。(中略)

《永江秀雄著『若狭の歴史と民俗』より》

これら「n」や「m」は、わが国では母音のa i u e oを加えて、ナニヌネノやマミムメモと発音されている場合が多く、更にラリルレロ・パピペポともなっている事例も見られるというところである。

《永江秀雄著『若狭の歴史と民俗』より》

義門は『男信』の中で、福井県内の地名も例に挙げています。小浜市と若狭町の一部からおおい町の一部にかけての地域は、かつて「遠敷」という地名で、古くは「おにふ」と呼ばれていました。「遠敷」の文字について、義門は「遠」の読みである「オン」の「ン」(n)は、ナ行への転用が多いことから「オン」が「オニ」と読まれるようになったと紹介しています。

※学僧：仏教に関連した学問や研究、祈祷に専念する僧侶

※本居春庭：1763年～1828年 本居宣長の長男、国学者。

check  
for

### 東條(条) 義門



永江 秀雄 『若狭の歴史と民俗』雄山閣  
冊子『げんでんふれあい福井 第29号』げんでんふれあい福井財団  
青山 晴男 『若越をひらいた人たち 物語きょうど史』東洋書院  
小泉 義博 「脇本庄」(『若越郷土研究』第26巻1号-32)

福井県郷土誌懇談会



当時、妙玄寺の辺りでは「証明寺は琴ひく、願慶寺は三味ひく、妙玄寺は糸ひく」と語られたといえます。「糸ひく」は糸繰り(糸をつくる)のことで、義門の妻が糸繰りで家計を助け、夫の研究を支えていたのでしょう。ひたすら学問に精進した義門の姿も浮かぶエピソードです。

# 間部 詮勝



1804年～1884年

第7代鯖江藩主。江戸幕府老中。  
日米修好通商条約や將軍継嗣問題など、  
大老井伊直弼を補佐するが後に対立。  
鯖江に庭園「嚮陽溪」を造り庶民に開放。

どんな子だった?



## 領民と親しく触れ合った若き藩主

詮勝は幼名を鉞之進えつのおしんといい、鯖江藩の第5代藩主詮熙あきひろの3男として生まれました。

文化11(1814)年、詮熙の長男で第6代藩主の詮允あきまねが急死したため弟の鉞之進が11歳で藩主を受け継ぎ、詮良と名乗るようになります。その後、14歳の時、元服して名を詮勝と改めました。

現代なら小学生という年頃で藩主となった詮勝は、叔父や家臣の補佐のもと、藩の財政難を克服するために質素・儉約を重んじ、若いながらも藩政に心を尽くします。また、領内の村々を訪ねて、領民と親しくなりながら自分の目で領内の様子を把握することも務めていました。

episode  
1

## 尊王攘夷派の処罰をめぐって井伊直弼と対立

詮勝は22歳で幕府の奏者番そうしやばんに就任し、初めて幕政に関与しました。奏者番は、大名が要職に就くための登竜門とうりゆうもんとされ、また、歴代の鯖江藩主には幕政に関与した藩主がいなかったこともあり、家臣や領民はたいそう喜んだといいます。

詮勝はその後も出世し続け、大坂城代や京都所司代を歴任した後、37歳の時には西の丸老中となり、幕府の首脳部までのぼり詰めます。この頃の詮勝について『間部詮勝と幕末維新の軌跡』は次のように解説しています。

江戸城西の丸(現在の皇居)に詰め、次期將軍や引退した將軍の世話に従事した詮勝は直接的に國政に関わることはないは

ずであった。しかし、將軍隠居後も大御所として実権を握り続けた家斉や後の第十三代將軍家定いえさだがいた西の丸で彼らと接していた詮勝はここでより強力な政治的パイプを築いていくことになる。

《鯖江市教育委員会編『間部詮勝と幕末維新の軌跡』より》

また、幕末に書かれた随想の『五月雨草紙さみだれぞうし』には、政治の表舞台ではない「奥」の近臣の一人として「陰ながら忠義を尽くした忠臣」と評されています。

その後、詮勝は体調を悪くして老中を辞任しますが、安政5(1858)年、大老井伊直弼の求めで再び老中に任命されま



(県内) 鯖江市  
(県外) 京都府京都市  
東京都千代田区・府中市  
千葉県市川市

す。井伊直弼は詮勝の頭脳と人柄を高く評価し、厚い信頼を寄せていました。

このことを示す史料が井伊直弼が家臣に宛てた手紙にある。(中略)つまり、同席大名よりも溜詰格である間部詮勝のほうが心得などを親切に教えてくれるので大変感謝している、という内容である。(中略)それから約十年を経て大老となった直弼は、自身に同調してくれる人材で周囲を固め、条約調印問題という難局を乗り切ろうとしたのだった。こうして、実に十五年ぶりに入閣した詮勝は、勝手掛と外交掛(財務大臣と外務大臣)という重要な役割を任されることになったのである。

《鯖江市教育委員会編『間部詮勝と幕末維新の軌跡』より》

詮勝が外国掛となったその年、井伊直弼は日米修好通商条約



## 誰でも楽しむことができる庭園「嚮陽溪」

詮勝は、当初の西の丸老中を辞任して、再び井伊直弼の要請で老中になるまでの15年間、鯖江藩の財政立直しを行い、また、西洋事情を学ぶなど、将来を見据えた藩政に力を注ぎました。現在の西山公園の前身となる庭園「嚮陽溪」を造ったのは、その頃のことです。

他の大名たちが自らの庭園を競い合って造った時代に、詮勝は領民と楽しむことを目的とした庭園を造ったのです。完成記念の石碑には、庶民とともに楽しむという詮勝自作の漢詩が刻まれています。さらに、作庭には、家臣や領民に混じって、詮勝も自ら鋤を手にして参加したという話も伝わります。

また、鯖江市深江町にある間部氏の菩提寺、萬慶寺本堂には、

をはじめとする安政の五カ国条約を天皇の許可を得ずに調印。詮勝は事後承諾で朝廷の承諾を得るという難しい役目を果たしています。しかし、こうした独裁的なやり方は尊王攘夷運動を激化させ、井伊直弼はその弾圧を厳しく行います。後に安政の大獄と呼ばれたこの弾圧によって、100人以上が処罰されました。

その指揮を執ったのが、腹心の部下であった詮勝でした。尊王攘夷派から井伊直弼は赤鬼、間部詮勝は青鬼と呼ばれ、詮勝の暗殺計画も練られていました。しかし、詮勝は、処罰をめぐる意見の相違などから井伊直弼と対立し、安政6(1859)年、老中職を罷免されます。また、桜田門外の変で井伊直弼が討たれた後、隠居謹慎などの処分を受け、その後は政治の表舞台に立つことはありませんでした。晩年は静かな暮らしの中で、詩や絵画に親しみ、多くの優れた作品を残しています。

詮勝がその頃に描いた、風神・雷神・龍神の見事な天井絵が、今も当時のままに保存されています。

- ※奏者番：大名や旗本が將軍に謁見するとき、その姓名の読み上げや進物の披露などをつかさどる職。
- ※溜詰：大名が江戸城に登城した際、黒書院の溜の間に席を与えられること。また、その大名。
- ※尊王攘夷：天皇を政治の中心とする尊王と、外国を追い払う攘夷の両方を主張する考え方。
- ※罷免：職務を辞めさせること。

### check for 間部 詮勝



『間部詮勝と幕末維新の軌跡』福井県鯖江市教育委員会文化課  
小山規『間部詮勝 青鬼と恐れられた老中』鯖江市教育委員会文化課  
『間部詮勝ゆかりの地ガイドブック』鯖江市教育委員会文化課  
『松平春嶽をめぐる人々』福井市立郷土歴史博物館  
『さばえ人物ものがたり上巻』鯖江市教育委員会文化課  
『郷土を築いた人々』鯖江市教育委員会  
吉田叡『幕末の政局と鯖江藩』  
『これき人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』

福井県立子ども歴史文化館



「太平の眠りを覚ます上喜撰 たった四杯で夜も寝られず」という黒船来航の狂歌は、詮勝の作といわれ、横須賀市ペリー公園の「じょうきせんのお碑」に「間部詮勝 号松堂作」と書かれています。詮勝が西の丸老中に就任した際、鯖江藩に築城の許可が下り、幕府から築城費も出ましたが、設計図までできたものの、鯖江城が築城されることはありませんでした。

なかね (せつこう)  
**中根雪江**



1807年～1877年

幕末の福井藩家老。松平春嶽の側近。国学を学び、その精神を越前に広める。藩主を補佐。藩政改革や一橋慶喜の15代将軍擁立、公武合体運動を推進。

どんな子だった?



幼い頃から学問好きで、大人になると国学に熱中

雪江は、文化4(1807)年、福井藩の上級武士の長男として福井城下に生まれました。名前は師質、通称を朝負といい、朝負の文字を雪江に変えて号に使用しています。

学問好きで勉強家であった雪江は、当時の武士にとって必須の教養とされた儒学を学び、その後、国学を熱心に学ぶように

なります。29歳の頃、越前を訪れた国学者の八木静修の講義を

聴き、感激した雪江は、本格的に国学を追求しようと決意します。

天保9(1838)年には、江戸で平田篤胤入門。その後、

国学の精神の提唱者として活動し、福井藩主の松平春嶽(慶永)をはじめ、多くの人々に影響を与えました。

episode  
1

主君の春嶽を名君に育てあげ、幕政改革を補助

天保9(1838)年、松平春嶽が11歳で藩主に就任すると、雪江は藩主に直接仕える御用掛となります。そして、3年後には、若い藩主による財政の立て直しを補佐し、儉約政策などを推し進めます。その頃の福井藩は、深刻な財政難に陥り、大きな赤字を抱えていたのです。

藩財政を復興するためには、君臣一丸となって弊政を刷新し、非常の改革を断行するしかない。新藩主松平春嶽を迎えた、雪江ら気鋭の藩士の目標は、財政復興の一点に集中され、必死の活動が開始される。

ことに雪江は、十代ながら春嶽が優れて英明の資質を有して

いることを見抜き、「この身は、この君に致すべき事」(『奉答紀事』)と、一身を春嶽の訓育と補佐のために捧げ尽くすことを決意する。

《三上一夫・舟澤茂樹編「松平春嶽のすべて」より》

また、雪江は学問の振興、橋本左内の登用、優秀な藩士の藩外遊学の奨励なども行います。そうした人的政策が功を奏し、福井藩の改革は、雪江や左内、由利公正ら改革派の働きにより、成果をあげていきました。

さらにペリー来航の際には、水戸の藤田東湖を訪ねて外交意見を聞き、藩論をまとめながら幕府の老中たちと調整するなど、雪江は藩主の片腕として大きな働きを見せます。また、これを

(県内) 福井市  
(県外) 東京都



機に雪江は、藩政だけでなく、將軍繼嗣問題や公武合体運動にも奔走し、国事のために力を尽くします。そうした雪江の動きに触れる著書の中から『橘曙覧』に見える雪江への評価を紹介します。

P.108 橘曙覧

曙覧は一介の町人でありながら、春嶽公の恵みを受け、彼の薫家に藩主自らの來訪を忝うしたほど、心の繁りがあった。また福井藩第一の勤皇家にして、明治の御世にも功深かつた中根靱負（雪江）とも深い友誼の仲だつた。（中略）

春嶽の宗家・末家の感を超える勤皇行爲、篤胤門に入つて復古運動に走つた雪江、この主従が苦しんだ板挟みの境遇、薩州その他の堪へ難い壓迫にさいなむ苦衷は、曙覧の心を悲壯なものとしたに違ひない。《折口信夫著『橘曙覧』（折口信夫全集 第十一巻）より》

主君の春嶽と想いを共にし、日本のために心血を注いだ雪江。そ

episode  
2

## 国学をもとに勤王の考えを広めた思想的リーダー

幕末から明治維新の激動期を描いた『夜明け前』にも、国学の精神をもって国のために働いた雪江が登場しています。

「各藩は今、大きな問題に衝き當て、誰も右往左往してる。勤王か、佐幕かだ。こういう時に、平田篤胤歿後の門人が諸藩の中にもあると考えると見たまえ。あの越前藩の中根雪江が、春嶽公と同藩の人達との間に立つて、勤王を鼓吹してるなどは、その好い例じゃないかと思うね」（中略）

「君の言う通りさ。今になってよく考えて見ると、何十年かかつたらこの御一新がほんとうに成就されるものか、ちよいと見当

うした雪江に、春嶽が厚い信頼を寄せていたことを物語る歌が残っています。春嶽が安政の大獄で謹慎処分となつた際、福井に戻つてゆく雪江に、春嶽は短冊と自分の手形を押しした歌を贈りました。

朝夕にこれをなかめてわか前に居るか如くに汝し思へよ

幾千里あづま越路は疎るとも今よりたのむ心合の風

そして、雪江からも春嶽に歌を返しています。

朝夕に仕へ來し身の明日よりは御許疎かりて生ける甲斐なし

この謹慎処分は、井伊直弼が暗殺された桜田門外の変の後には解かれ、春嶽は再び幕政に参加することになります。もちろん雪江も側近として春嶽を補佐して再び活躍。晩年は三国（坂井市三国町）で過ごし、71歳で亡くなりました。

がつかない。あれで鉄胤先生などの意志も、政治を高めるといふところにあつたらうし、同門には越前の中根雪江のような人もあつて、随分先生を助けましたらうがね、いかな先生七年には勝てない」

《島崎藤村著『夜明け前』（昭和文学全集 第2巻）より》

※公武合体：朝廷（公）と幕府（武）が一体となった政治を目指す思想。

天皇の妹の和宮と將軍徳川家茂の婚礼はその具現化の一つ。

※弊政：弊害の多い政治。

※勤皇（勤王）：天皇による政治を実現しようとした思想・運動。

※佐幕：幕府を支持するという意味。

check for

中根 雪江



島崎藤村『夜明け前』新潮社

三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往来社

『福井県史』通史編4 近世二・通史編5 近現代一 福井県

『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第5集 青少年育成福井県民会議

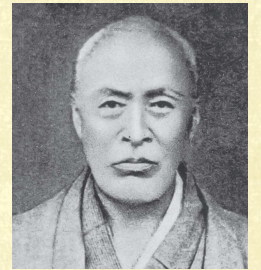
『これき人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』福井県立こども歴史文化館



雪江が執筆した著書には『昨夢紀事』『再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』『奉答紀事』があります。雪江によって正確に記録された春嶽の伝記や事績は、信頼性が高いとされ、幕末史の研究における貴重な史料となっています。

# 内山 良休

うち やま りょう きゅう



1807年～1881年

幕末に活躍した大野藩家老。  
藩直営の物産販売所大野屋を  
チェーン展開し、  
財政の立て直しなど藩政改革に成功。

どんな子だった？



## 小姓からスタートし、才能を認められて大出世

良休は本名を七郎右衛門良休、幼名を亀次郎といい、幼い頃から学問を好み、大野藩に出仕する以前は、江戸に出て儒学を学びました。

良休は18歳の頃、藩主に仕える小姓の中で藩主への取り次ぎなどをする大小姓という役目につきます。その後、とんとん拍

子に出世し、天保10(1839)年には、銅山を管理する役目に任じられています。また、弟の隆佐も兄同様に大小姓からスタートし、藩主に認められ、兄弟そろって頭角を現していきました。土井利忠は古い因習にとらわれず、有能な人材を自身の判断で登用することを断行。藩政改革の実現に力を注ぎます。

episode  
1

## 大野屋の商売で破産寸前の藩を救う

江戸時代終わり頃の大野藩は、たいへんな財政難に苦しんでいました。藩主の土井利忠は、天保13年(1842)年、自身にも家臣にも厳しい俵約を課す「更始の令」を発令し、翌年、良休を財政担当に抜擢。破産寸前の藩を立て直す役目を負った良休は、「更始の令」を着実に遂行しますが、膨大な赤字は、それだけで埋まるものではありませんでした。そこで良休が打ち立てた経済政策は、誰も考えつかない攻めの経営戦略でした。良休は領地内の経済の流れを把握し、そのデメリットをどうメリットに転じるかを考えます。導き出した戦略は、大市場への物品の直接販売でした。武士が商売に乗り出そうというのです。それは士農工商という身分から考えても、あり得ないチャ

レンジでした。

安政2(1855)年、大野藩は大坂に大野屋を開設。大野産の刻み煙草や織物などの商売が始まりました。良休を主人公とした小説『内山良休 そろばん武士道』の店の描写からは、活気にあふれ繁盛した大野屋の様子が伝わってきます。

「へい、いらつしゃい、いらつしゃい。本日開店の大野屋でございます。煙草を初め野の幸、山の幸に海の幸。越前大野の品々を山ととり揃えた大野屋にござい。大野屋、本日開店。さあ、いらつしゃい」(中略)

客たちは天井から吊り下げられた「たばこ」、「つむぎ・ふと



(県内) 大野市 越前町織田  
(県外) 大阪府大阪市

もの”、“たべもの”の木札を目印に真直ぐ目的の売り場に行き、好みの品を求めては帰ってゆく。

《大島昌宏著『内山良休 そろばん武士道』より》

さらに良休は、横浜をはじめ各地に大野屋を開店し、また、

## 借金を返済し、大野の発展に尽くした内山兄弟

良休のアイデアは成功し、80年にかかるといわれた藩の借金を短期間で返済してしまいます。また、それだけでなく大野屋の商売と並行して、西洋式の帆船「大野丸」を造り、交易物資の輸送を行い、蝦夷地（北海道）などの北方開拓にも乗り出しています。

この船の建造や蝦夷地の探検で活躍したのが、良休の弟である隆佐りゅうすけでした。隆佐は他にも藩校「明倫館めいりんかん」の創設や西洋式軍隊への転換などで手腕を発揮しています。隆佐が登場する小説『銭屋五兵衛と冒険者たち』にはこんな一節も見えます。

「内陸部の、それもほとんど山に囲まれたこの大野藩が、海に乗り出すという企てを立てたことを、さぞかし奇妙だと思っだろう。しかし、これは主人土井利忠様をはじめ、我々重役一同も是非とも実現したい企てなのだ。そこで、銭屋五兵衛の番頭として、長年北方交易に深い経験を積んだおまえの意見を聞きたい。そのために今日はここへ来てもらったのだ」（中略）  
弁吉は必死に聞き耳を立てた。内山は話を終わった。

- ・大野藩は、北方交易に乗り出す。
- ・そのために大船を建造する。
- ・藩内の産物をその船によって売り出す。

地元の大野には、全ての大野屋の総本店として大坂屋という名の店を開きました。こうしたチェーン展開をする大野屋は、大野産の品を売るだけでなく、各地の産物の交易や貸付けなどの金融も行い、大きな利益を上げていきました。

- ・売った先から、異なる産物を買付け、これまた他国に売り出す。
  - ・その実務を行なうために、日本の各港に、商會を設ける。
  - ・大船の運営も、商會の運営も、全て藩の直営とする。
- ざっとこんなところだった。弁吉は口がきけなくなった。さすがのかれも呆れていた。

（山の中の大名家が、ここまで考えていたのか！）

と、今さらながら土井家の重役陣が結集した知恵の素晴らしさに、驚嘆した。  
《童門冬二著『銭屋五兵衛と冒険者たち』より》

大野屋は全国に37の支店を持つまでになり、明治維新後も活発な商いを続けました。また、廃藩によって多くの藩が士族の失業問題を抱えますが、大野では銀行のような業務を行う「良休社」の創立ほか、良休を中心に旧大野藩士が金融や製糸などの会社を起し、失業を防ぎます。明治14（1881）年、良休は、大野のために走り続けたその生涯を静かに終えました。

check  
for

### 内山 良休



大島昌宏『内山良休 そろばん武士道』学陽書房

童門冬二『銭屋五兵衛と冒険者たち』学陽書房

『土井利忠公とその家臣たち』大野市

『大野市史』大野市

坂田玉子『奥越史料6 大野藩藩店「大野屋」の研究』大野市教育委員会

『福井県史』通史編4 近世二 福井県

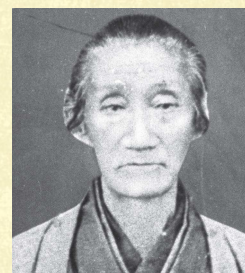
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第6集 青少年育成福井県民会議

『これき人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』福井県立こども歴史文化館



明治11（1878）年、北陸の視察で明治天皇行幸の際、良休は今庄（南越前町今庄）に呼び出されました。そして、「長年にわたり商いに励み、また、廃藩後の士族が就職できるようにしたことを天皇陛下がお聞きになった。今後も励むように」と、良休の功績を明治天皇が讃えたことを伝えられました。

よし だ とう こう  
**吉田 東篁**



1808年～1875年

**福井藩士。東篁塾主宰。**  
**藩校の正義堂や明道館で教え**  
**橋本左内ら多くの有能な人材を育てる。**  
**藩主の政治顧問としても能力を発揮。**



**低い身分から学問で身を立って出世**

東篁は竹やぶの番人をしていた下級武士の子として、福井城下の桜の馬場(福井市日之出3丁目)で生まれました。東篁の人物像を伝えるエピソードに、幼い頃のこんな話があります。父から叱られ、押し入れで正座しているように命じられた東篁は、長時間それに従い、母が出てくるように言います

が、父の許しがあるまではと、そのまま父の帰宅を待ったといえます。まじめで真つ直ぐな性格の少年であったようです。東篁は11歳の時、家の近くにできた正義堂という藩の学問所に通い、漢学や儒学を学び始めました。群を抜いて優秀であった東篁の評判は、藩内に知れ渡ったといえます。

episode  
1

**弟子たちに漢文を通して伝えた実践の大切さ**

福井藩は幕末から明治維新にかけての激動期に、国のために活躍した多くの人材を輩出しています。そうした有能な藩士たちが福井に誕生した原点とも言える存在が東篁でした。

天保2(1831)年、東篁は23歳で正義堂の句読師に任じられます。句読師は漢文の読み方を教える教師ですが、東篁は単なる字句の解釈にとどまらず、儒学の教えを重視しました。書かれていることの意義を深く理解し、実践することを学ばせたのです。

安政2(1855)年、新しい藩校の明道館(県立藤島高校)ができる。藩主の松平春嶽から抜擢され、助教に任命されました。その後、江戸に出るなど、明道館を離れたこともありましたが、晩年まで明道館で子弟の教育にあたりました。

また、正義堂で教えていた頃から、東篁塾という私塾を開き、そこでも藩士の子弟教育に情熱を傾けます。東篁の門下からは、後に藩主を補佐して活躍した鈴木主税や橋本左内、明治新政府の基礎固めに貢献した由利公正や杉田定一ほか、多くの優れた人々が巣立っていきました。

後に福井藩の改革を成功に導いた熊本藩士の横井小楠が、福井で初めてその考えを話した講義は、東篁塾で行われました。福井藩はその後、小楠を政治顧問に迎えています。小楠を招く藩命を受けて熊本へ行く村田氏寿に、東篁は小楠への手紙を託しています。

(県内) 福井市



## 幕末の揺れ動く国情の中で、藩主の政治顧問として

— 今般、村田巳三郎、御地に出張いたしますことにつき、野拙より一応事情を申し上げます。(中略)

賢丈をお招きしたいというのは弊藩一統の公論で、かつてご来臨を仰いだことでもあり、衆望が集まった次第です。それも

東篁と小楠について『吉田東篁先生』(旭社会教育会・旭公民館ほか編)は、次のように、その功績を讃えています。

一八五八年(安政五年)福井藩は熊本の学者横井小楠を明道館の大先生として招きました。小楠は郷里の熊本藩では用いられず、片いなか引きこもっていたのです。それは、彼の信じる陽明学がたいそう急進的であり、彼自身、才氣人にすぐれていて、その考えがあまり進歩的、改革的で、一種の危険人物とみられていたからです。

その小楠を春嶽は自分の藩の大先生に招こうというのです。ここで問題となるのは、すでに明道館の教授となつた吉田悌蔵との関係です。よぞから先生をつれてきて、悌蔵の上にするにかならないからです。しかし、悌蔵はそのようなことにこだわらぬ人物ではありませんでした。小楠を喜んで出迎え、小楠が講義する時は、自分の門人をつれてその講義を熱心にうけるのでした。真に学問の道を求める人だけに出来る広い心というべきでしょう。

小楠の講義は新しい時代の流れにさおさした、すこぶる魅力(みりょく)あるものでした。悌蔵の弟子たちも、その新鮮な講義に感動し、感化されていきました。悌蔵は、それに一まつもの淋しさを感じながらも、自分の門人たちが、新しい世界を求めて、大きく羽ばたく姿をあたたかく、じつとみつめ励ますので

永久というのではなく、三年でも五年でもおいでいただければ、弊藩ならびに野拙の大慶と存じます。

《白崎昭一郎著『橋本左内』より手紙の一部》

した。

《旭社会教育会・旭公民館ほか編『吉田東篁先生』より》

※文中の「悌蔵」は東篁の通称

嘉永6(1853)年のペリー来航時、東篁は水戸藩の藤田東湖や武田耕雲齋、元小浜藩士の梅田雲浜ら尊皇攘夷派の人々などを次々と訪ね、攘夷を実行するために意見を交わしました。この時点での福井藩の考えは、徳川斉昭が中心となって攘夷を推進してほしいというものでした。しかし、世界のこと次第にわかってくると、福井藩は開国して西欧と対等な関係になることを重視し、攘夷の考えはなくなりました。そして、時代は明治へと急展開していきます。

明治元(1868)年、新しい時代が始まったその年、東篁は藩に戊辰戦争をやめるべきとの意見書を提出したのを最後に隠居。明治8年5月2日、新しい時代に門弟たちが活躍するのを見届けたかのように、68歳でこの世を去りました。

※藩命…藩の命令。

※野拙…男子が自分をへりくだってという語。

※賢丈…相手を敬ってという語。

※弊…自分に関することの謙遜を示す語。

※大慶…大きなよろこび。

### check for 吉田 東篁

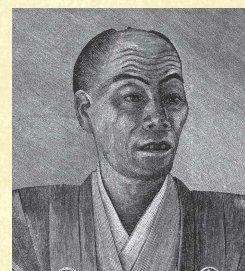


『吉田東篁先生 わたしたちの大先輩・福井学問の創始者』  
旭社会教育会・旭公民館ほか  
松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集1』原書房  
『福井県史』通史編3近世一・通史編4近世二 福井県  
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第2集 青少年育成福井県民会議  
『これき人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』福井県立こども歴史文化館



福井での横井小楠による初の講義は、東篁塾で行われました。この時、由利公正は小楠から、世を治め民を救うという「経世済民」の考え方を聞き、おおいに影響をうけます。東篁に実践の精神を学び、小楠に政策の根本的な理念を学んだ由利公正は、それを後の経済政策にまさに実践したのでした。

# 横井小楠



1809年～1869年

熊本藩士、思想家。

福井藩主松平春嶽の政治顧問となり

藩政や幕政の改革、公武合体を推進するなど

幕末のシナリオを描いた影の立役者。



## 母に次いで父も亡くし、祖父母に育てられた少年時代

小楠は熊本(肥後)藩士の次男として、九州の肥後国内坪井(熊本市坪井)に生まれました。平四郎と呼ばれていた子どもの頃は、負けん気が強く、近所の子を泣かせて、親に苦情がくることもある腕白な少年でしたが、8歳の時、藩校に入学すると、秀才ぶりを発揮していきます。

13歳の頃、乗馬の練習の帰り道に友人との話の中で、たまたま政治や社会の成り行きについての話になり、2人は世の中を心配し、将来は自分たちが国を背負っていこうと誓ったといいます。15歳の時には、勉学の成果が目覚ましい褒美として、お金を与えられるほど、優秀な青年に成長していきました。

episode  
1

## 勝海舟、西郷隆盛、坂本龍馬、吉田松陰らに絶賛された才能

幕末といえば、勝海舟、西郷隆盛、坂本龍馬がよく知られ、小楠の名はあまり知られていませんが、実は小楠なしに語れない部分も大きいといわれます。そうした小楠を象徴するものとして、『横井小楠 維新の青写真を描いた男』は、勝海舟らが小楠を評した言葉を次のように記しています。

勝海舟は『氷川清話』の中で、「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲(隆盛)とだ」  
「横井の思想を、西郷の手で行はれたら、もはやそれまでだと心配して居たに、果して西郷は出て来たワイ」と語っている。  
その西郷は、「小楠が諸国遊歴した際、人材であると言った人

で、その後、名を挙げなかつた者はいなかつた」と小楠の人物鑑識眼を激賞。坂本龍馬は「西郷や大久保たちがする芝居を見物されるとよいでしょう。大久保たちが行きづまったりしたら、その時、ちよいと指図してやって下さい」と小楠に語り、吉田松陰は「先生の東遊の節は、ぜひ教に立寄って藩の君臣を指導してほしい」と懇請している。また、高杉晋作も「小楠を長州藩の学頭兼兵制相談役に招きたい」と久坂玄瑞に相談している。  
幕末維新の英傑達が、こぞつて小楠に一目を置き、龍馬、松陰、高杉に至っては師と仰いでいたのである。(中略)  
華々しい「革命家たち」の陰に隠れて目立たないが、その構想力、影響力からいえば、小楠こそ、まさしく「維新の青写真

(県内) 福井市  
(県外) 熊本県

を描いた男」と呼ぶべき人物だったのである。

《徳永洋著『横井小楠 維新の青写真を描いた男』より》

こうした先見性をもつ小楠の思想は、古くからの因習に縛ら

れる人々には受け入れられず、地元ではしばしば衝突が生じていました。28歳で熊本藩の藩校の塾長になった小楠は、塾寮改革を藩に申し入れて採用されますが、寮生たちの反発で、結局は頓挫してしまつたこともありましたが。

episode  
2

## 福井藩のシンクタンクとして、

## 藩政改革、幕政改革を推進

嘉永2（1849）年、小楠が熊本で開いていた私塾に、福

井藩士の三寺三作が入門。三作は、藩の命令で朱子学の優れた

学者を探すためにまず京都へ向かい、小浜藩士の梅田雲浜から

小楠を推薦されて肥後に行き、しばらくの間、小楠の私塾で指

導を受けました。そして、翌々年、小楠は諸国を巡る際に福井

を訪れ、講義を行います。講義を受けた福井藩士の中には、後

に東京府知事となる由利公正もいました。また、旅の途中、大

坂で橋本左内に会い、藩政改革などの話で互いに通じるものを

確信しています。

福井藩主松平春嶽が藩校の創設について意見を求めた際に

は、翌年に『学校問答書』を送ってきました。そこには、経世

済民の考え方をもとに民衆の生活の安定を図るための人材教育

が大切であると説かれていました。

春嶽は小楠を福井に迎えるべく、村田氏寿を肥後に遣わしま

すが、熊本藩との交渉は難航。春嶽が直々に江戸の熊本藩邸に

出向くなどして、ようやく承諾され、安政5（1858）年、

小楠は福井藩で春嶽を補佐することとなり、6年間に渡り、藩

政改革や幕政改革などに力を尽くします。

藩政改革では、産業を積極的に興して貿易によって民富め

ば国富む“という考え方を提唱。それを取り入れた福井藩は物

産総会所を設立し、外国貿易で巨額の利益を得ます。この利益

が勝海舟や坂本龍馬の資金援助にも使われました。

また、政治改革の指針として、参勤交代などの無駄な出費を

抑え、海軍増強を図り、人材を多方面から活用し、議論を通し

て政治を行うなどを柱とした「国是七条」を提出します。そし

て、朝廷と幕府の関係を修復させ、国家の政治機関を強化する

ために、福井藩の中根雪江らとともに公武合体にも手腕を発揮

しました。実はこの頃、福井藩は軍事力を結集して京都に入り、

將軍や朝廷に新しい日本のあり方を承認させる政策を計画して

います。そのシナリオを描いたのが小楠でした。実現には至り

ませんでした。もし実現していれば、歴史は異なった道を進

んでいたかもしれません。

明治元（1868）年、小楠は新政府の参与（大臣）に迎えら

れますが、その翌年、京都で暗殺されてしまいます。享年61歳、

新しい国家の構築がこれからという時の惜しまれる死でした。

※経世済民：世の中をよく治めて人々を苦しみから救うこと。「経済」の語源。

check  
for

### 横井 小楠



本山幸彦『横井小楠の学問と思想』大阪公立大学共同出版会  
『横井小楠』（加来耕三企画／構成／監修・すぎたとおる原作・中島健志作画）ポプラ社

徳永洋『横井小楠 維新の青写真を描いた男』新潮社

栗谷川虹『白臺の声 横井小楠暗殺事件の深層』新人物往来社

福本武久『舌剣奔る 小説横井小楠』竹内書店新社

童門冬二『横井小楠と由利公正の新民富論』経済界

三上一夫『横井小楠 その思想と行動』吉川弘文館

『福井県史』通史編4 近世2 福井県

『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第1集 青少年育成福井県民会議

『これき人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』福井県立こども歴史文化館

こぼ  
れ話

坂本龍馬の有名な言葉に“日本を今一度洗濯いたし申し候”という一節があります。実は龍馬が小楠から「天下一統人心洗濯希うところなり」と教えを受け、それに感銘を受けた龍馬が、自身も同様の志を持ち、姉への手紙に綴ったものでした。龍馬は、天下の人物として小楠をたいへん尊敬していました。